
遠き風に願いし君は

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠き風に願いし君は

【Zコード】

Z2114E

【作者名】

ひつじ

【あらすじ】

何も要らない。世界の片隅で、彼とひとつそりと生きてていければいい。ささやかな少女の願いは、だが叶わなかつた……。 携帯版は、1行毎の改行です こどもの日企画「ムーンチャイルド」参加作品です “ムーンチャイルド”の語で検索すると、他の企画作品も読みます

第1節 災厄

In the Capital

少女はただ、呆然としていた。

クレーターの中心に座り込んで。

どうしてこうなったのか、彼女には分からなかつた。いや、分かつていてるが信じたくなかった。

この大陸の中でも屈指の軍事国家・ゼイテ。強力な力にものを言わせ周囲の国々を飲み込んできた、その国のはここは首都だ。

いや、首都だつた……と言つべきだろつ。

ほんの一日前まで大河ルーナスの下流、島にも見える巨きな三角州とその両岸に、首都の町並みは広がつていた。

それが今は、ない。

町の中心には王城の代わりに少女のいるクレーターが穿たれ、その外側は元は何があつたのかも分からぬ瓦礫の山だ。三角州を囲んでいた城壁も崩れ、両岸の町並みにまで被害は及んでいた。果たして王都に住むうちのどれほどが、無傷で済んだのか。

災厄の引き金となつた少女は、まだ座り込んでいる。

年は……十歳かそのくらい。柔らかそうな薄い色の髪に透き通つた瞳の、かわいい少女だつた。

どこか虚ろな瞳から、ぽつりと涙がこぼれる。

周囲は静かだつた。

あるいはもう救助が始まつてゐるかも知れないが、この辺りに近づく人影はない。そもそも近づくことも出来ない。

今だ煮えたぎるクレーターそのものが、人を阻んでいるのだ。

だが土砂が一瞬にして蒸発したために出来たクレーターの中にいながら、少女は髪の毛一筋たりとも傷つく気配はない。

「あたし……」

桜色の唇から、言葉が漏れる。

「あたし、あたし……」

答えはなかつた。

あるはずもなかつた。

それから……どのくらい、少女は座り込んでいたのだろうか？

今朝は青く広がっていた空だが、今は巻き上げられた土砂でかき曇り、やがて重い雨が落ちてきた。

黒い雨。

一瞬にして焼け焦げた灰なのか、それともただの土なのか　と
もかく雨は、不吉に黒い。

少女の着ている純白の衣に、その雨がぼつぼつと染みを作つてい
つた。

雨に打たれる彼女の瞳から、次々と涙がこぼれ落ちる。

大人ならばきっと、自分がこいつせざるをえなかつた理由を見つけ、
自分自身をかばうことが出来ただろう。
だがまだ幼いこの子には、そう考える余裕さえなかつた。ただ目
の前の現実に、打ちのめされるだけだ。

降りしきる雨が熱い大地に落ちては蒸発し、霧となつていく。
やがて、周囲が冷え始めた。

「　いたぞつ！」

突然雨の音を破つて、怒声が響く。

はつと少女が顔を上げた。

様々な声が飛び交う。

「あれだつ、あの魔女だ！」

「可愛いナリしやがつて……！」

本能的に少女は、現れた人影とは反対へあとずさつた。

その辺りで拾つた棒きれ、庭にありそうな鎌や鍬、あるいは包丁、時には剣 ともかくそういうた「武器」を手にした人々が、クレーターの縁を超えて降りてくる。

その表情は明らかに殺氣立つていた。

僅か数日前に、歓呼の声で少女を迎えたといつのに。

「いや……」

立ち上がり、駆け出す。

掴まつたら何をされるか、分からんないと思った。

「逃げるぞ！」

「逃がすかっ！」

追う声を背に、必死に逃げる。

だが追われるのは子供で、追うのは大人たちだ。身軽さでは上回つても体力ではかなわない。

徐々に双方の距離は詰まり、じき少女は追い詰められた。

「いや、やめて……」

恐怖でそれ以上、言葉が出ない。

少女をかばう者は、誰もいなかつた。

泣きながら怯える少女に手を上げられる大人など、普通はいない。しかし憎悪は、そんな当たり前の心境をじくく簡単に葬つてしまつている。

「さつさと殺しちまえ」

「馬鹿言え。ハつ裂きにして、苦しませてやるー。」

ひとりの男が、ぎらりと狂つた視線を向けた。

「女房も子供らも、こいつのせいだ

「うちの子もだよつー！」

じり、と包囲の輪が縮まる。

その中で少女は怯えるばかりだつた。もうどうじつにいのか、分からぬ。

「い……や……」

切れ切れにやつと言つた言葉も、大人たちを押しとどめることはなかつた。

凶器が振り上げられる。

「いやあつーー！」

瞬間、光が閃つた。

世界が、太陽が落ちたが如き白に染め上げられる。
そして轟音。爆風。

「あ、あ……」

殺される、その思いから固く瞳を閉じていた少女は、恐る恐る動いて、知つた。

先刻と同じ過ちを、繰り返したこと。

新たに穿たれたクレーターはずつと小さなものだが、取り囲んでいた大人たちは跡形もなかつた。

先ほどとは違う混乱と恐怖が、少女を襲う。

何もかもが怖かつた。

信じていた大人たちも、そして自分自身も……。

泣きながら、歩き出す。

行く当てはなかつた。だがそれでも、ここを離れようと思つた。

道路とおぼしき瓦礫の間を抜け、ただひたすらに歩く。

今度は誰も、邪魔はしなかつた。

第2節 出会い

Nei

「遅くなつちまつたな……」

独り言をつぶやきながら、俺は通りを駆けてた。

いい加減陽が落ちかけてて、そろそろ行きかう人もまばらだ。

近道するか。

縄張りに入つたならともかく、この辺はまだそこからちよつと遠い。なのに日が落ちてからもウロついてたら、場所が場所なだけにヤバかった。

建物の間の、路地つていうより隙間に入り込んで、次の通りへ一気に抜ける。

それを繰り返して何度もか。

「つと

」暗い物陰をうつかり見落として、俺はなんかにつまづいた。けつこうテカイ。

「つとく、こんなど真ん中に、こんなでかいモン

！」

悪態つきかけて、途中で言葉を飲み込む。

ボロ布かなんかだと思つてた塊から、足が出てた。

それも、人間の。

ただ、そんに大きくない。たぶん十歳くらいの子供だ。

死体。

その言葉が真つ先に、脳裏に浮かんだ。

「この辺りじゃ……時々ある話だ。

交易で栄えてるこの街だけど、貧民街はひたすら貧しい。スリ、かっぱらいは当たり前だし、「キ使われまくつたり食いつぱぐれたりで死んだ人、けつこう子供が多い」がこうして道端に放り出されてることも、たまにはあった。

しゃがみこんで、そつと毛布をめぐる。

うわ。

見られないようなのを想像してたけど、違う意味で絶句する。

淡い色の髪。陶器みたいな肌。真っ白な衣装。「汚れてない」って言葉が似合う、人形みたいにきれいな女の子だ。

どつかケガした様子はなかった。だからたぶん、病氣が衰弱死だらう。

ふつうはこれほどきれいな子なら、どつかの金持ちに売られてそれなりの暮らしが出来る。

もちろん奴隸扱いだけど、食いつぱぐれることはないし、運が良ければ養子にしてもうえることだつてあった。

万が一大人になる前に病死とかしても、道端にそのまま放り出されるなんてことはない。家の墓地の隅つこくらいには、入れてもらえるはずだ。

なのにこんなとこに死んで放り出されてるってのは、そんなちよこの幸運にさえ見捨てられて、独りつきりでここまでやつと生きたんだろう。

かといって、この辺の通りの子でもないはずだった。

これほどの美少女なら、どこの縄張りに居ても尊になる。けど、

見たことも聞いたこともない。

だからたぶん、どつかこの辺のとんでもない店に売られてきて、店の奥でコキ使われてたはずだ。
で、病気かなんかのお決まりのパターンで……死んで放り出されただろう。

「ひどいよな……お前が悪いワケじゃないの！」

せめて町外れの共同墓地に、そう呟つてこの子をぐるみ直して抱き上げようとして。

生きてる？

触れた肌がまだあつたかい。

「おい！」

ゆすつて軽くはたくと、この子がうめいてかすかに田を開けた。
透き通った、そんな感じの瞳。それが少しの間さまよった後、俺の方へ向けられる。

子供らしくない諦めきった表情に、寂しい微笑みが浮かんだ。

ありがとう。でももう、いいの。

そう言つてるのが分かった。

「だめだ、死ぬな！」

思わず言葉が出る。

もう長くなれやうだけど、でも田の前で出合つた子に、こんな死に方させたくなかつた。

薄汚れた建物の裏で、ボロ布にくるまつて虫にかじられながら独りで死ぬのを待つなんて、まともな死に方じやない。
せめてベッドの上で、そう思つて、この子を抱きなおす。

「もうちょっとがんばれ、いいな？」

ぐつたりしてゐるこの子に声をかけながら、抜け道を急ぐ。家はここからならすぐだった。

古い石造りの階段を駆け上がつて、ドアの前で騒ぐ。

「姉貴、開けてくれ！」

中から姉貴の声と、もうひとり別の人の中。

「どうしたんだ、ニール。いつに無く慌てて」

開いたドアから顔を出したのは姉貴じゃなくて、いつも姉貴を診てるドクターだった。ちょうど往診中だつたらしい。

んで当然ながらドクター、俺の腕の中を見て血相変える。

「すぐ寝かせて」

俺ももちろんそのつもりだから、そつとこの子を俺のベッドに下ろした。

「いつたい、どこで？」

「向こうのパン屋の奥手。捨てられてた」

俺から様子を聞きながら、ドクターが手際よくこの子を診ていく。

「まずいな、かなり衰弱してる」

「可哀想に……」

姉貴も起きてきた。

「姉貴、寝てなつて」

風邪もひかなきや腹も壊したことない俺と違つて、姉貴は昔から線が細くて身体が弱かつた。ただ幸い、一昨年死んだ親父やお袋。いつも俺がガキの頃、がそれなり蓄え残してくれてて、その分で姉貴の薬代が貯えている。

まあ、格安つてのもあるけど。

いつも診てくれる没落貴族のドクター、若いのに腕も人柄も良くて、貧乏人の俺たちから見ると神様みたいな人だ。

もつともそれ差し引いても姉貴への往診が、多い上に安かつたりタダだつたりするのは、他にワケがありそうな気はする。

「どうせなら、姉貴持つてつてくれんねえかな？」

弟の俺としちゃ、医者と一緒になつてくれた方が、姉貴のためにもいいと思う。

ただ、歳がけつこつ離れてるからなあ……。

姉貴は18、ドクターは確か30くらい。

こんないい人がなんでこの歳まで独り身なのかは、俺も良く知らない。

それに人が良すぎてドクター、自身も町外れの屋敷で、小間使いもいない貧乏暮らしだつたりする。

まあ俺らもその辺は立派な貧乏だから、どうつてことないけど。

姉貴の方も見ると、けつこつドクターの事意識はしてる。

ただこつちも歳が離れてると、自分が弱いのを気にかけてた。実際、今だつてちょっとでも何かすると倒れるから、好きな刺繡とか編み物以外は一切させないくらいだ。

てか、それさえ最近は弱ってきて、だんだんペースが落ちてきてるし……。

あんまし考えたくないけど、姉貴も先は長くなさそうだった。

でも、田の前のこの子ほどひどくない。

「どうです？」

「今日が明日が峠だわ。暖かくして、飲めそつなら暖かいものを飲ませてやりなさい」

つまりは、息を引き取るまで見てるしかないってことだ。

それでもまあ……あの場所でのまま逝くよりマシだらう、そう

思いなおす。

2人分診てもらったから、その分いつもより多くお金を渡そうとしたけど、ドクターは受け取らなかつた。

「あの子には、何もしてないからね……」

אָמֵן וְאָמֵן

「可かあつたひ、すぐ平びこ来るんだ。夜中でも溝ひなーかー」

「はい」

それからドアのところで姉貴となんかやり取りしてから、ドクターハーは出て行った。

姉貴がこつちへ戻つてくる。

「もはや無理やう？」

「普通にムリだと思つ」

「J.J.まで弱ってるんじゃ 食べ物も喉を通るかどーか そもそも田を覚ますかどうかも怪しい。

で、当たり前だけど食べられなきや終わりだ。

「ちゅうと隣から、スープもらつてくれる。つゆなら飲めるかもだし、隣の部屋は、中年のおばさんが独り暮らしだった。話じや3年前の流行り病で、旦那も子供もいつぺんに全員亡くしたらしい。そのせいか、そのあと隣に越してきた俺たちを、まるで実の子供みたいに可愛がってくれてる。

最近じゃ寝てるほうが多い姉貴を置いて出かけられるのも、実言うところのおばさんのおかげだ。

手先が器用なおばさんは、昼間出かけずに家で刺繡や編み物をして、それを売つて生計立てた。俺も時々見せてもらつけど、すごい細かくて綺麗なのを作る。

で、時々隣の姉貴の様子を見にきてくれるうえ、自分のと一緒に俺らのスープなんかを毎日作ってくれた。

申し訳ないから、毎月ちゃんと食費は渡してるけど。ともかくそのおかげで、パンとミルクとチーズさえ買って帰れば、あとは夕食にあつづける方法だ。

「お湯、沸かした方がいいかしら？」

「やめろって。こないだかまどの火吹いてるうちに、ひっくり返つたろ？ あとで俺がやるつて」

あの時は2日寝込まれた。倒れた時に火傷しなかったのが幸いだ。そんなこと騒いでたら、ドアを叩く音がして隣のおばさんが入ってきた。

「ニール、帰ったのかい？」

「スープ持つてきたから、早くお食べ。今日は野菜とソーセージだよ」

言いながら台所でスープを移す音が聞こえた後、おばさんがこっちの部屋へ來た。

「ほら、奥になんかこもってないで どうしたんだい、この子？」
「死に掛けて捨てられてたから、拾ってきたんです」

「なんだって！」

おばさん慌てて、この子の看病始める。

「可哀想に、こんなになるほど放つて置かれて。ニール、すぐお湯沸かしとくれ

「ほい」

と、この子が目を開けた。バタバタうるさくしたのが、マズかつたらしい。

「ゴメンな、起こして。今お湯沸かして、スープ持つてきてやつか

「う

透き通った、でも焦点の合わない瞳が、じつりを向く。

そして、涙がこぼれた。

「お、おい、泣くなつて
思わずそう言つたけど、じつが泣きたくなる気持ちほんくつかつた。

だから、それ以上言わずに頭を撫でてやる。
それから、訊ねた。

「名前、言えるか？」

今訊いとかないと、最後までわからずじまいになりそうで、無理を承知で訊いた。

こいつの唇がかすかに動く。けど、聞き取れない。

耳を寄せる。

「……………」

切れ切れにそう聞こえて、俺は訊き返した。

「ファイア、でいいのか？」

「そうだと、こいつが僅かに微笑む。

「そか。ファイアか。

ここにいて、いいからな。ずっと
ファイアがまた、泣き出した。

第4節

F i a s i d e

ふと、ファイアは目を覚ました。

見慣れない質素な天井。見慣れない質素な部屋。

だが上掛けやシーツは、きちんと洗つて陽に干された匂いがした。

どこだらう?

ほんやりと考える。

はつきり覚えてるのは、捨てられたところまでだ。

ただ、それを恨む気持ちはなかつた。

連れてきた者たちは何度も何度も謝りながら、店からはずつと遠いあの場所に、隠すようにして自分を捨てていつた。

あいつは買われるよつは、ずつとマシだから……。

そう言つていた言葉に、偽りはない。

自分でも分かるほどに弱つてきていたファイアだが、完全に動けなくなつたのは1週間ほど前だ。

起き上がろうとしても力が入らず、手伝つても立たなくなつた。

もう長くはない、誰もがそう思つた数日後。

「お前の買い手が決まつた」

そう主が告げ、ファイアとたまたま一緒にいた仲間は背筋が冷たくなつた。

さらに買い手の名を聞いて、震えあがつた。

主は普段は、店の者たちを売らずに『貸し出して』いる。その方

が長い間儲かるからだ。

だから『売る』といつのは法外な金が積まれた時か もう稼ぐことが出来ないと思われた時に限られる。

ファの場合は、明らかに後者だつた。

もう動けないファに、これ以上お金を稼ぎ出すことは出来ない。ならば死ぬ前に、欲しがる者に売つて少しでも稼ぐこといつ魂胆だ。

もちろん普通に考えれば、そんな子供を誰が買うのかと思つが…

…この世には悪魔も棲んでいる。

どうせ死んでしまうなら、その前に存分に愉しみつゝ、といつ輩が。

普段は誰が誰に買われても、ともかくつわべだけは無関心を裝つゝ皆だが、この時ばかりは互いに囁きあつた。

買い手の残忍さと変態ぶりは、よく知られている。それでも今まで誰もさほどの被害がなかつたのは、ひとえに店から「貸し出され

て」といたからだ。

だが買われてしまえば、その保護もなくなる。何よりファには、もう逃げるどころか抵抗する力さえ残つていない。

さすがに今回は、誰もが哀れんだ。

幸いファは館の中でも、年かさの者たちに可愛がられていて、彼らが行動に出た。主が留守にした隙にファを馬車の底に隠し、館の外へとどうにか出したのだ。

主には丸め込んだ医者と一緒に、急に息絶えたと言えばいい。あれだけ弱つていれば、そういうことだつて時にはある。

そして死体は、館の中に病気が広がらないよつて、早々に捨てたと。

ただ身寄りのない者同士、外へ出したものの行く当てはなかつた。かといって孤児院などに連れて行けば、すぐ嘘がばれて連れ戻され、フイアはもちろん自分たちまでヒドい目に遭つだらう。

そういうコネが、館の主にはある。

結局僅かな時間ではどうするにも出来ず、館からはなるべく遠い貧民外の奥へ、見つからぬいように置いていくのが彼らには精一杯だつた。

せめて、静かに死ねるようのこと。

耳元で何度も謝つていた声を、フイアは覚えている。
同時に、これで安心して死ねると思った。
だから、恨んでなどいない。

それに。

こんな奇跡が起つたのだから……。

「ゴメンな、起つて。今お湯沸かして、スープ持つてきてやつから」

聞こえた声に、視線をさまよわせる。

あの時自分に「死ぬな」と言つた人が、心配そうに覗き込んでいた。

急に涙があふれてくる。

本当は当たり前の でもフイアにとっては初めて言われた、「死ぬな」という言葉。

ひどく重くて、なのこじりじり、こんなに輝く言葉なのだらう?

誰もフイアに、そう言つ者はいなかつた。館の誰が生きて誰が死のうが、ほとんど関心は示されなかつた。

必要なのは商品であつて、その「誰か」ではなかつたのだから。

「お、おこ、泣くなつて」

そうは言つたものの彼は、それ以上は何も言わなかつた。ただゆつくりと、頭を撫でてくれる。

そういえばこんな世界もあつたのだと、ファイアはやつと黙り出した。

ずっと忘れていた、暖かや……。

「名前、言えるか？」

訊かれて、ファイアは必死で答えた。かすれる声を、やつとの思いで繋ぎ合わせる。

聞き取れないのか、彼が耳を寄せた。

「ファイア、でいいのか？」

伝わつた、そのことに安心して微笑む。彼も微笑んだ。

「そか。ファイアか。

ここにいて、いいからな。ずっと」

また、ファイアの瞳から涙がこぼれた。

N e i l

ドクターの見立てを裏切つて、ファイアはけつこうしぶとかつた。あれから1週間、相変わらず起きられないし動けないけど、でもちゃんと生きてる。

というより、必死で生きようとしてるみたいだった。拾つたあの時に見せた諦めの表情は、家へ連れて来てからは全く見せてない。

あと意外にも良くなつたのが、姉貴の方だった。面倒見る相手が出来たせいで、気力が付いたらしい。

なんせあんなに寝てるしかなかつた姉貴が、日中けつこう起きてるんだから、たいしたもんだ。

その姉貴が、ファイアが眠つたのを見計らつて、俺にそつと話しかけた。

「もつといい薬を飲ませて、美味しいものを食べさせたら、この子良くならない?」

「そりや、なるかもだけどや……」

うちは実言えば、そんなにやたら貰えつてワケでもなかつた。贅沢さえしなきや、5年以上働かないで食える程度の金は、親が残してくれてたりする。

ただ、そうそう使うわけにもいかなかつた。

なんせ姉貴は弱い。だから今でも薬が欠かせないし、これからだつてそうだろう。てか、もつと必要になるかもしねない。そこへ加えて、ファイアだ。

こいつが起きられないのをどういう言ひ方は一切ないし、こうなつた以上最後までちゃんと面倒見るつもりだけど、やっぱりお金は

幾らかかる。

かといって俺の稼ぎじゃ、暮らすだけで手一杯だ。

けつぎょく薬代は親の金を少しづつ食いつぶして出すしかなくて、今までの姉貴の分だけで、残してくれたお金が2割はなくなってる。黙つてるけど。

ともかくそんなわけで、今以上には出せなかつた。
それをどう言いつくろおうか、考えあぐねて黙つてゐると、姉貴の方が切り出した。

「あのね、二ール。これ、換金して使ってくれない?」「え?」

姉貴が俺に差し出したのは、かなり大きな宝石だった。ぱっと見水晶っぽいけど、微妙に黒っぽい色を帯びて、中のほうでなんか光がゆらゆらしてゐる。

「なんだこれ? てか、うちここんなもん、あつたのか」「ゴメンね、内緒について言われてたから」

なんでも訊けば、姉貴が万に備えて、ずいぶん昔に親父から持たされたものらしい。もともとはお袋が、どつからか拾つだかして持つてきたんだとか。

「あたしもよく分からぬけど、父さんの話じや傭兵ギルドへもつて行けば、かなりの値が付くらしきの」

「へえ……」

宝石屋じやなくて傭兵ギルドってことは、なんか戦つ時用のモノなんだわつ。

「けど、そんなに簡単に金に換えちまつたら、あとで困るだろ?」

「大丈夫よ、あともうひとつあるし、他にもよく分からぬ秘薬と

があるから

「……」

そんなに財産あつたのか……。

よくよく訊いてみると、俺が持つてて薬代にしてる宝石類も、元々はその手の良くわかんないモノを換えたらしかった。
用意周到な親父、破格の値が付くヤツはそのまま姉貴に持たせて、それ以外は宝石類に換えて俺に持たせた、つてことらしい。

「使ってあげて。

それにどうせ、あたしも使うんだらうし」

「分かつた」

姉貴がそこまで言ひのこ、反対は出来なかつた。

「んじやこれから、ギルド行って換えてくる。ついでに、なんか皿いモノ買つてくるよ」

と、フイアが皿を開けた。どうもまだよく寝込んでなかつたらしい。

頭を撫でてやる。

「少し出かけてくつから。帰つてきたら、皿にモノ食わせてやつからな」

どこへ行くんだろう、そんな顔をちょっとだけしたあと、フイアは微笑んだ。『いつてらつしゃい』の意味なんだろう。

けど次の瞬間、はつとフイアが表情を変える。
必死に俺のほうへ、手を伸ばそうとする。

「おい、どした?」
フイアの視線を追う。

俺の手の中。

姉貴からも「うつむいた、よくわかんない宝石だ。」

「これか？」
わずかに、でも必死につなぐくフイアの様子に、俺は宝石を渡してやつた。

一瞬光る。

「え……？」

次の瞬間かなり大きいはずの謎の宝石が、綺麗さっぱり消え失せてた。

そしてフイアが肩で息をしながら、ベッドに手をついて起き上がる。

「フイア？」

「ごめんなさい、だいじょうぶ……」

鈴の音みたいな透き通った声が、はっきり返つて来た。

「動けるのか？」

「はい」

まだちよつと辛そうだけど、たしかにフイアはしつかり起き上がつてた。声も良く出せないほど弱つてたせつとは、大違いだ。

「こーゆー使い方するもんだったのか」

「いえ、普通はちょっと、違うんですけど……」

なんかよく分からない。

でもフイアが動けるようになったから、他の事はどうでもいい気もした。

「まあいいや、治つたんだから。

あ、まだ寝てろよ？ ずっと寝てたんだから、急に動いたらまた倒れるぞ」

ともかく一安心だ。

「なんか食いたいものあるか?」

「えつと……」

まだ食欲をほどないらし。

だとすると、無難にパンとミルクと とか考えてたら、姉貴が口を挟んだ。

「それより二ール、ファイアの服が先でしょ?」

「え? あ……」

そんなもんすっかり忘れてた。

確かに言われてみればファイア、俺のシャツを着せてるだけだったりする。寝てる間はそれでも構わなかつたけど、いつなつたらもういかないだろ? けど俺に、そんなもの買えって言われても困るわけで……。

「あー、それえーと、明日にでもおばさんに頼んで見繕つてしまつて、とりあえず今日はなんか貰いモノ」

「自分でも何言つてるかよくわかんね。

けど幸い、言いたいことは通じたみたいで、2人が笑つた。

「そしたらあの、あたし、お湯……」

「だから寝てるつて。そのうち元気なつたら、やつてくれればいいからや。

ともかく今日おばさんも呼んで、みんなで快気祝いだ

言にながらほとんど無理やつ、姉貴とファイアとをベッドに押し込む。

それから隣のおばさんにての次第を話して、俺は上機嫌で買い物に繰り出した。

F i a s i d e

まだ、生きてるんだ。
目が覚めるたびに思う。

全く動けないのに、声も出せないのに、ほとんど飲まず食わずに、それでもフィアは死なずに居た。

だから思う。もう少し、生きてみよう。

せめて今日は、出来たら明日も、そう思って氣づけば数日が過ぎていた。

そのことに自分でも驚く。捨てられた時にはもう、その日のうちに死ぬだろうと、自分でも思っていたのだから。

ただ、良くなるようには思えなかつた。残念ながら自分の身体に、そういう気配は全く見えない。

それでも。

あの助けてくれた彼 ニールと言つらしい が、ことあるごとにフィアを覗き込んで話しかけ、頭を撫で、スープなどを食べさせてくれ、励ましてくれる。

それが嬉しくて応えたくて、フィアは必死に生きていた。

この身体では、何も返せない。

それならせめて、「がんばれ」と言つ言葉に応えたかった。

館に居た時は、こんなふうに面倒をみてもらうことなどなかつた。誰もが自分の身を守るのに必死で、他人まで手が回らなかつた。だからそれしか知らずに育つってきたフィアには……この暖かさは天上にも匹敵するものだったのだ。

まどろみながら、人の気配を感じて目を覚まし、少し相手をしてもらつてまたまどろむ。

フィアが目を覚ますたび、身体が弱いらしいお姉さん いりあらはイルゼと言つた も、とても喜んだ。

最初はそんなに起きていて大丈夫なのかと、ほんやりとした頭で考えたりしたが、どうも平気らしかつた。話し声を聞いていた限りでは、どうやら振つてわいた妹？の面倒を見るのが楽しくて、体調が良くなつたのだという。

それなら尚更と、フィアも自分を励ます。

もう少し、生きられるところまで。
みんなが、悲しまないようだ。

だからその時も、話し声で目を覚ました。
フィアが目を覚ましたのに気づいて、彼が頭を撫でてくれる。

「ちょっと出かけてくから。帰つてきたら、皿にモノ食わせてやつからな」
言えない『いつてらつしゃい』の代わりのつもりで微笑むと、彼も笑つた。
と、視界に入ったものにはつとする。

何かは知らない。見たこともない。
だが、身体の奥底から何かが告げた。『あれ』が必要だと。
必死に手を伸ばす。

指先だけでも触れれば、それで十分なはずだ。本能がそう告げている。

「おー、どした？」

ファイアの様子に、彼が気づいた。

「これか？」

必死にうなづく。

不思議そうな表情のままファイアの手に、彼がその宝石を握らせた。

「え……？」

彼の驚いたような声と共に光が満ちる。心が大きく息をつく。

生き延びた。

全身がそう謳つた。

まだ辛いが、身体は動く。そのままファイアは、ベッドに手を付いて起き上がった。

「ファイア？」

「ごめんなさい、だいじょうぶ……」

久しぶりに、自分で自分の声を聞く。

「動けるのか？」

「　　はい」

ずっと寝ていたせいだろう、まだ少し辛い。が、それだけだった。動けなかつたほんの少し前までは、雲泥の差だ。

「こーゆー使い方するもんだつたのか

「いえ、普通はちょっと、違うんですけど……」

訊かれて、説明に窮する。

取り込んだ今なら分かるが、これは精霊の類だ。「力ある石」とも言われる。

それでも瀕死の病人が治るとは思えないのだが……自分の場合は、

この石の力が上手く作用するらしかった。

ただ、これが何かも知らない相手に、どう説明したら理解出来るのかと困り果てる。

が、先に彼のほうが諦めた。

「まあいいや、治つたんだから」「結局はそういうことだ。

戦乱の続く今の世の中、過程や理由をとやかく言う人間は少なかつた。過程よりも、食べられた、生き延びたという結果の方が重要なのだ。

彼が優しい笑顔を向ける。

「あ、まだ寝てろよ？ ずっと寝てたんだから、急に動いたらまた倒れるぞ」

うなずいて横になると 実際ずっと起きているとまだ辛い彼が毛布をかけてくれた。

「なんか食いたいものあるか？」

「えつと……」

ずっと食べていなかつたせいか、さすがにまだ食欲がない。困つていると、隣からお姉さんが口を挟んだ。

「それより二ール、ファイアの服が先でしよう?」

「え？ あ……」

突拍子もないことを言わされて、今度は彼が答えに窮する。

「あ～、それえーと、明日にでも俺……じゃなくておばさんに頼んで見繕つてもらつて、とりあえず今日はなんか古いモノ 女物の服と言うのが効いたのだろう。慌てぶりがおかしい。

久しぶりにこんなふうに笑つた。そう思いながらファイアは、起き

上がりながら切り出した。

「そしたらあの、あたし、お湯……」

「だから寝てろって。そのうち元気なつたら、やつてくれればいいからさ。

ともかく今日はおばさんも呼んで、みんなで快気祝いだ

じゃあ行つてくると、足取りも軽く出て行くホールの後姿に、フ

ィアも嬉しさを覚えながらまたベッドにもぐりこんだ。

N e i l

ファイアはあれつきり、嘘みたいに元気になつた。半月以上過ぎて
るけどなんでもなくて、朝から毎日普通に起きてる。

ただ……料理とかは致命的だ。ぜんぜん任せられない。

あんまりヒドいんで訊いてみたら、一度もやつたことないって話
だつた。それも作つてることさえ、見たことないって話。
もちろん、洗濯その他もしたことないんだとか。

思い出したくないからしくて、ここへ来る前のことをほとんど話さ
ないから、なんでそうなのかはよく分からぬ。

でもたまに、ぽつぽつ言つ話をまとめるとき、暮らし自体は貴族並
だつたみたいだ。黒パン知らないし、砂糖とか普通に使つてたつぽ
いし、上等なお菓子も食べてたらしい。

他にも字が読めて書けて、すごい複雑な計算も簡単にやつてのけ
る。俺なんか訊いたこともない詩とかも、すらすら暗誦できる。

あとは刺繡とか。

つまりが、まるつきり貴族の娘みたいな状態だ。

それが病氣?になつて動けなくなつて、放り出されたつてところな
んだろう。

もつとも俺らで言わせれば、元気になつたし姉貴の話し相手にも
なるし、細かい買い物とかやってくれるしで、とりあえずは言つ事
なしだつた。

「ひつやすじいねえ、たいしたもんだ」

ファイアに売り上げの計算任せた隣のおばさんが、感心して声を
あげてる。

「あとこれに、今日持つてく分で……合計させて2万ルルシ、払つてもらえると思います」

「なんだって！」

こんどは素つ頓狂な声があがつた。

「いつもこんだけ持つてくとあの親父、1万8千ルルシだつて言ってたんだよ。なんてこつた！」

「でも全部で、1万ルルシが1枚と、5千ルルシが1枚、1千ルルシが5枚ですから……」

要するにおばさん、ボられてたらしい。

「つたくあの親父、人が難しい計算出来ないと思つて！」

今度からあいつのところじゃなくて、違うところへ持つてこつかね」かなり怒つてゐるし。

「ただ、あそこ安いんだよねえ……」

「幾らなんですか？」

フイアに訊かれて、おばさんが答える。

「この、いちばん小さいのあるだる？」

当面これだけでよくて、10枚も納めるのにたつた1万3千ルルシだつてんだよ。だからどうもねえ……」

「あの、それ……そつちの方が、単価高いですよ？」

「え？」

さうつとフイアは言つたけど、ここに居る全員、何のことを分かんなかつた。

「ええと、今納めてると「ひむか」の小さいのは一千ルルシですよね？」

「ああ、そうだよ」

「ここまで俺でも分かる。

「でも新しいところは、10枚で1万3千ルルシだから、1枚は1

300ルルシですし……」

「や、そつなかい！？」

おばさんが唖然とする。

「えーとその、やつあると何かい？ 違うとこへ納めた方が、高くなるのかい？！」

「納める数によつますけど……」

俺らが計算苦手だから、ファイアも説明が難しいらしい。

「もし、新しいところに小さいのを18枚納めたとしたら……2万と400ルルシになりますから」

「そつだつたのかい……」

つまり、単にボられてただけじゃなくて、徹底的にボられてたつぽい。

「小さい方が、やつぱり作るのは早いんだよねえ。

」のいちばん大きいの1枚やる間に、10枚近く出来るんだ。中くらいのと比べても、5枚は出来るし

「それだと……この大きいのを一枚と中くらいのを2枚作る間に、小さいのは20枚近く出来ますけど……」

「……」

さすがのおばさんも絶句する。

「まるつきり向こうの方が、楽で儲かるとはねえ。

あの強欲親父め！」

俺も思わず、横から口を出す。

「おばさん、いつそ卸し先変えちまえよ」

「ああ、明日これ納めたら、変えることにあるよ。

」そういつ、今日のスープはさつき、そこのかまどに置いといたからね。後でお食べ

言つて暗くなり始めた廊下へ、おばさんが出てく。と、今度は入

れ替わりに、近くの鍛冶屋のおっさんが入ってきた。

「すまんが、フイアちゃんヒマかね？」

「あ、はい」

フイアが振り向いて立ち上がる。

「その……なんだ、もし時間があつたら」の手紙読んで、返事書いてもらえんかね？」

「はい、すぐ読みますね」

最近人づてに伝わつたらしくて、読み書きが堪能なフイアのところは、ちよくちよくこうやって手紙とかが持ち込まれてた。フイアも役に立つのが嬉しいのか、それともモトからお人好しなのか、イヤな顔ひとつしないで引き受けた。

ただ、それだとまるつきりタダ働きなワケで。

鍛冶屋のおっさんに囁く。

（あとでフイアに、小遣いくらいはやってくださいよ？　じゃないと、コイツ働きに出さないとならないんで）

（分かつとる分かつとる、心配すんな）

俺らのヒソヒソ話には幸い、フイアは気づかなかつたらしくて、そのまま手紙を読み始めた。

「えつと、親愛なる兄上へ。うちのいちばん下の娘の結婚が決まりました」

めでたい話らしい。

フイアの声を背中で聞きながら、かまどに火を入れる。

「フイアちゃん、すっかりいいみたいね」

「ああ」

姉貴も起きてきて、その辺を手伝い始めた。

「それにしてもあの子、前は『』にいたのかしら？ 読み書きも計算も上手だし」

「言わねえからな……」

当人が言いたがらないのに、ムリヤリ聞き出すわけにもいかないし。

「ま、なんでもいいんじゃね？ 今は『』にいるんだしさ」

「それもそうね」

話しながらパンとチーズ切ってスープかき回して、ついでに買つてきた果物並べて、肉を包みから出してみる。

「あら、今日は『』馳走じやない」

「親方がさ、小遣いくれたんだよ。これでフイアに、いいもの食わしてやれって」

なんでも話じや、昨日近所へお遣いに出たフイアが、親方のおかみさんが野良犬に噛まれそうになつたとこを助けたらしい。

「意外とす』いのねえ、あの子」

「俺もそれは思つた」

間に割つて入つて睨みつけたら逃げてつたつていうけど、それにしたつてたいしたもんだ。

ちなみにフイア自身は、野良犬撃退したあと、こつそり帰つちまつたらしい。おかみさんがその辺の人に話を聞いて初めて、誰だか分かつたんだとか。

「鍛冶屋のおっさん帰つたら、隣のおばさん呼んで、みんなでこの肉食べよつぜ」

「おばさんなら、さつきまでここにいたじやない」
何を馬鹿なことを、姉貴の視線がそう言つてゐる。

「マジで『』馳走あんの、忘れてた」

フイアの計算技に気い取られて、すっぽり抜け落ちたつてやつだ。

姉貴が笑う。

「ホント、いつもながらそそつかしいんだから。

今のうちに知らせてくる。おばさんが何か食べちゃつたら、もつ
たいないでしょ」

姉貴が暗くなつた廊下へ出でぐ。

向こううじや代筆が始まつたんだり、鍛冶屋のオヤジがファイアと
なんだが、話す声が聞こえ始めた。

しばらくそれを聞いてから、肉を切り分ける。

「えーと、塩……」

姉貴がすぐ帰つて来ないのは、行つた先でおばさんと話し込んで
んだろう。

まあ、こないだまで起きてる母が珍しかつたの思えば、ずいぶ
んいいつてやつだ。

と、影が差した。

「ん？ フィア終わつたのか？」

「……うん」

俺らにだいぶ慣れたらしくて、フィアの口調は前に比べて、かし
こまつたとこがなくなつてきてた。

ただ性分なのか、エラく大人しくて内氣だ。今だつて俺の隣で、
なんか言つたそつたのに黙つて立つてる。

「どした？」

埒あかないからこつちから訊いたら、フィアが手を差し出した。

「あの、これ……」

手のひらに乗つてたのは、小銭だ。きつとひつきの鍛冶屋の親父
に、もらつたんだろ？

「良かつたな、小遣いもらつたのか」

けどここに、動かない。

「あの親父に、なんか言われたのか？」

そう訊いたら、フイアはふるふると首振った。

消えそうな声で、やっと言こ出す。

「あたし……働いてないから、これ……」

「悪い、聞いてたのか」

こいつの手に、俺はその小銭を握らせた。

「ああ言わなきやお前このまま、いこよつて口キ使われちまつといもつてや……」ゴメンな。

金のことを気にすんなって。お前の食ごぶりへりご、ビリードもなる

「でも……」

泣き出しそうな顔でまだ言つてゐるフイアに、俺は返す。

「だから、気にすんなって。

お前、こじんちの人間だら? なのこそんなこと云にしつ、ビリすんだよ」

ついでに、姉貴もお前のおかげで元気になつたつて付け加えたら、今度こそフイアが泣き出した。

どうすりやいこんだ。

泣いてる女の子の相手なんて、俺したことないわけ……姉貴意外と強い、泣いてんの見たことないし。

どうすりともできないで、とりあえず頭を撫でてみる。

え?

悲しみ、諦め、喜び、安堵、そこそこみんなもんが、俺の中こ湧き上がった。

いや、違う。

俺自身は混乱してパニックしてるだけで、これは
今まで一言も言わなかつた、こいつの想い、辛さ、そういうつたモノ
が流れ込んでくる。

同時に、以前何があつたのかも。

「そんなん、ナシだら……」

言葉が口をついて出た。

締め付けられるような辛さと諦めに、思わずこいつを抱き寄せる。

ナシだ。こなん、ぜつたいナシだ。

なのにこいつは誰を恨むでもなく、ただ諦めてビームでも透明で
……。

かける言葉が見つかんなかつた。ヘタな慰めなんて、何くような
ものじやない。

だから何も言えなくて けど俺が何か言つより先に、こいつの
方が先に涙ぬぐつて顔を上げた。
そして、言ひ。

「あつがとつ……」

まだ泣きそうな顔で、でも極上の笑顔で。

「だから、こいんだつて」

「うん」

今度は落ち着いたらしくて、ホントの笑顔を見せる。

「さ、メシにしようぜ。姉貴とおばさん、呼んできてくれつка？」
ファアのヤツはもう一度微笑んでうなずくと、身を翻して外へ出て行つた。

ファアのだ。

第9節 異変

F i a S i d e

ふと、夜中に目が覚めた。

何かが、来る。

辺りは月明かりが照らし出していた。

見慣れた天井。

ここへ運ばれて来てから、どのくらいになつただろう？　もうひ
と用近いだらうか？

考えたことのないほど、幸せ。

だがそれは……今日までかもしれない。

つ、と涙がこぼれた。

何も要らなかつた。今までじゅうぶんだつた。なのになぜ、
たつたそれだけのことが、許されないのだろう？

鎧戸の隙間から入り込む風が告げる。“それ”が来るのだと。

同じベッドの中、隣にはニールの姿があつた。

自分が連れて来られてからじばらぐ、ニールは自分のベッドは明
け渡して、その辺の床で寝ていた。

だがどうしても1人で寝ているのが怖くて怖くて、動けるように
なつてからはつい彼の毛布に潜り込んでしまい、今は2人で一緒だ。

じうやつて隣でしがみついて、眠れるだけで良かつたのに。
なのに、それさえも……。

ひとつため息をついて、彼をそつと揺り起こうとして、驚く。

「なんだ、お前も目、覚めたのか？」

寝ぼけているのではない。一ールはもう、はつきりと皿を覚ましていた。

「悪いんだけど、起きて支度してくれるか？ 僕、姉貴起こして言いかけた言葉が途切れたのは、姉のイルゼが部屋に姿を見せたからだ。

「一ール、起きてる？」

「彼女はもう、すぐここでも出かけられる格好だつた。

「姉貴さすがだな。

「フィアももう起きてっから、すぐ動けると思つ

「良かつた。貴重品まとめておいたから、半分持つててね。あたし、おばさん起こしてくるから」

「誰も、どうして、などと訊かない。

訊く必要などなかつた。それはもう……すぐそこだ。

悪しきもの。忌むべきもの。

逃げた方がいい、そう本能が告げている。

「どうせ荷物なんて、大してないしなあ。鍋惜しいけど。あーフィア、これ持つか？ お守りにしかなんないかもだけど」そう言つて彼が差し出したのは、きれいな装飾が施された短刀だった。

確かに、お守りにしかならないかもしれない。

「刃見せるだけでさ、ビビるヤツけつこつこるじ。

つか、俺から絶対離れるなよ？ はぐれたら最後、何されるかわからねえから

「……うん」

答えながらフィアは、違うことを恐れていた。

何かが、自分で中で牙をむこうとしている。

仮面を投げ捨て、本来の姿を現そうとしている。

自分が何者なのか分からぬ恐怖。

そのまま助からず、路地裏で朽ちたほうが良かつたかもしれない。
一瞬浮かんだそんな思いを、ファイアは振り払つた。

目の前に立つ、彼を見上げる。

「どした？」

「ううん……なんでも、ない」

それはただの、偶然だったのだろう。ほんの少し何かが違えば、
あの路地裏で出会うことさえなかつたはずだ。
だが奇跡は起こり、自分はいまこうしている。
それなら。

これから何が起こるか、ファイアは漠然とだが感じ取つていた。
ああ見えてニールは、剣が使える。深夜や早朝、剣の稽古をして
いるのを、ファイアは知つていた。「離れるな」という言葉は嘘では
ない。

だがそれでも、対処しきれないだろう。来るのは……そういうも
のだ。
だからファイアは自分に誓う。この内なる恐ろしいものを、彼を守
るために使おうと。

隣が騒がしくなつて、イルゼが部屋へ戻ってきた。

「一応起こしたんだけど、おばさんまだ時間がかかりそうね……。
何がどうなつてゐるのか分からぬから、仕方ないんだけど」

「俺、ちと行つて説明していく」

入れ替わりにニールが出て行き、女性2人が残された。

「フィアちゃん、急に起こして悪かつたけど、大丈夫?」

「あ、はい。目が覚めましたから……」

あら、と彼女が小さく声をあげた。

「すごいわね、ちゃんと気がつくなんて。

でもこれからが本番だから、気をつけてね

「はい」

隣からは、まだ動く気配が感じられない。

危ない、と思った。本当にもう、時間がない。同じ事を感じているのだろう、イルゼも焦り始める。

「またたくもう、2人とも何やつてるのかしら」

と、外でどおんと言つ何かが爆発したような音と、たくさん悲鳴とが上がった。

「来た、ってワケね」

ひ弱で線が細いとばかり思つていたイルゼの雰囲気が、一変する。それまでまどろんでいた野生の肉食獣が、目を覚ましたようだつた。病弱ゆえに体力は続かないだろうが、その点は子供のフィアも同じだ。だがどちらも、見かけに騙されて手を出せば、痛い目に遭うだろう。

2人の視線が交錯して、互いに相手が助けを必要としないことを確認する。

「にしても、遅いわね。これじゃ逃げ遅れかねないじゃない」

気が急いで待ちきれなくなつたころ、ようやく隣でドアの開く音がした。

こちらもすぐに外へ出る。

抜け目のない表情を見せる二ールと、大変なことが起こつたことだけは理解したらしい、怯えた隣人とがいた。

「姉貴、どこ回る?」

「先生のところしかないと思うけど」

先生と言つのは、あのいつも来ている医者の先生だらう。ここからは遠くないらしいが、ファイアは実際に行つた事はなかつた。

「やつべ、来てる。行くぞ」

一ールに手を引かれて階段を駆け下りる。

阿鼻叫喚。

一目見て凶暴さが分かる大きな魔物たちが、貧民街のそこかしこで暴れていた。

「マジやべえな……」

逃げ惑う人々。

片手で幼子の手を引き、もう片方の手に赤ん坊を抱いた母親を、格好の獲物と見たのだろう。一気に魔物が迫った。

かぎ爪が振り上げられる。

だがそれが振り下ろされるよりまだ早く、風のようにファイアが間に割つて入つた。

残像のように、ふわりと舞つた長い髪。透き通つた瞳が、魔物を睨みつける。

瞬間、魔物の振り上げられた腕が、音を立てて弾けとんだ。

苦しげな咆哮。

魔物の血走つた目が、母子からファイアへ移る。

だが彼女は全く怯まず、華奢な手を魔物に向けてかざした。

金属の触れ合つような、不思議な音。

辺りの気温が一気に下がる。虚空から何本もの氷の槍が現れ、魔物へと飛ぶ。

声にさえならない絶叫。

天へ憎しみを吼えようとした姿のまま、魔物が瞬時に氷像となる。魔物の足をファイアが蹴ると、巨体は傾いて地に落ち、澄んだ音を立てて砕け散つた。

「すごいわね、やるじゃない」「

イルゼが感嘆の声を上げる。

「俺らの方が、足ひっぱりそうだな」

ニールも苦笑した。

その反応に、フィアはほつとする。

考えるより先に身体が動き、魔法を繰り出し、敵を屠る。屈強な戦士ならともかく、自分のような子供がそんなことをしたら、いったいどう見えるか。それをフィアは承知していた。なのに思わず事態でとっさに動いてしまい、内心びくびくしていたのだ。

嫌がられるのではないか、と。

何をつまらないことを、といつ人もいるだろう。だがフィアは、それが怖かった。

あの思い出すのも嫌な場所でならまだともかく、やつと見つけた居場所を失くしたくなかった。

だから杞憂に終わったことに、心の底から安堵する。

「さ、お母さん早く。ほら、おばさんも！」

イルゼが幼児を抱き上げ、茫然自失の母親と隣人とを急かす。

「行きましょ、こっち」

促されて小走りに移動を始めたあとは、早かつた。可能な限り敵をやり過ごし、襲われればフィアとニールとが手早く倒す。

どうやら人も魔物も町の中心部、貧民街と本来の町とを隔てる城壁の方へ向かっているようで、郊外へ向かう一行が出会う数は進むにつれ減つていった。最初に、一番外側からやられたせいだろう。この調子では城壁周辺は地獄絵図だろうが、まさか戻つて助けるわけにもいかなかつた。

そのまま町を出て、ニールに導かれて近くの丘へ急ぐ。

「もう、ほんどのないみたいね」

「だな」

人が大して居ないせいなのか、偶然狙われなかつただけなのか。
ともかく見上げる丘の上 大した高さはないが の屋敷は血な
まぐさとは無縁で、静かなままだつた。

第11節

「イニがだいじよぶで良かつたぜ」

麓にある鏽び付いた門をくぐりながら、ニールがつぶやく。

「……良かつたって、大丈夫じやなかつたらどうするつもりだつたのよ」

「ンなこと言つたつて、姉貴が先に言つたんじやねーか」

些細な姉弟の言い合いを、別の声が押しつぶめた。

「イルゼとニールかい？」

聞き慣れた、ドクターの声だ。

「無事で良かつた、ここから町を見て心配していたんだ」
屋敷と同じで、彼も何事もなかつたようだつた。

「街は……やつぱりひどいのかい？」

「ええ」

ドクターの問いに、短くニールが答える。

「そうか……」

僅かな間視線を落とした後、ドクターは顔を上げて軽く微笑んだ。

「とりあえず、屋敷へ行こう。疲れてるだろ？」

言いながら丘の上へ続く道を、たどり始める。

辺りは暗くて今ひとつ見えないが、どういうわけか庭園ではなく、
煙のようだつた。案外ここで、自給自足の生活をしているのかもし
れない。

ドクターが長い長い坂を上つて、一行を屋敷へと先導する。

「ボロ屋敷だが、外よりはマシだらうしね」

館は確かにやたらと古びていて、幽靈屋敷さながらだ。

だが貴族の住まいなだけあって広いし、痛んでいるとは言え貧民街よりはずっと立派だった。

「にしてもこ、よくヘーキでしたね」「ニールが不思議そうに言つと、ドクターが笑いながら肩をすくめた。

「度を越した心配性のご先祖が居てね。莫大なお金をかけて、土地ぜんぶに強力な結界を施したんだそうだ。まあおかげで助かつたんだから、今度からよく敬わないとだが」嘘から真、といつ話らしく。

「口クなお茶もないが、飲んでゆつくり休むといいよ。僕のほうはじき、忙しくなつてお茶を淹れる間もなくなるだろ」

「しね」確かに魔物の襲撃が一段落すれば、こ、は怪我人であふれ返るだろ。

そんな話をしながら、一行が屋敷の中へ入ろうとした時。

悪寒を覚えて、ファイアは立ち止まつた。
振り返る。

「どした？」

気づいたニールの声に、他の面々も足を止める。

「月、が……」

「月？」

振り仰いだ空には、氣味の悪いほどに緋い月。

「なんだ？」

「月に、橋……」

「うわ！」とのよついで、フィアの口から言葉が漏れる。

「橋？ なんだそりや？」

「聞いたことがあるな……」

ドクターが腕を組んで考え込んだ。

「たしか100年に一度、月と地上のあいだに橋がかかって、それを渡つて魔物が地上へ落ちてくるって話だつたと思うんだが」

「それ、シャレになんないですよ……」

そんな会話を続ける一行の視線の先で、天空から伸びた靈む何かと、地上から伸びたものとが繋ぎ合わさつていぐ。

「どう、なるのかしり」

イルゼがつぶやく。

これから何かとてつもなく大変なことが起こるのは分かるが、それがどんなものか、誰にも想像がつかなかつた。

N e i l

「おーい、あがつていいぞー」

下のほうから親方のデカい声がする。

「あ、はいー」

答えて俺は荷物の山から降りた。

あれから数日。あの橋とやらは今んとこ、それ以上何もない。

夜は不気味だけ。

月が昇つてくると、ぼんやりした橋が夜空に見える。

でもそれだけだし、そんなことより食つまつが先だから、俺初めみんなどつか働き口見つけて働いてる。

街は、マジでヒドかった。

聞いた話じや俺らが抜け出した後、かなりヤバいことになつたらしい。魔物と炎とに追われた連中が市街への城門へ押し寄せたけど、市民連中が門を開けるわけない。

けつぎよく最後は魔物が門を破つて中まで入つちまた ザマみろつてんだ らしいけど、そいつらが通り過ぎた後は死体の山だつたつていう。

貧民外で助かつたのは桁外れに運が良かつた連中と、どうにか港方向へ逃れられた連中、後は俺らみたいにいち早く街を捨てたヤツだけだつた。

焼け落ちた街の中を通り、港へ向かう。

市場のあつた広場は今、家なくした連中の住み場所になつてて、物の売り買いとか出来ない。

ただ逞しいもんで、ほとんど無傷だつた港には翌日から船が出入

りしてゐるから、そこでみんな働いたり売り買いしてた。どうにか難を逃れて、先生の屋敷に身を寄せた連中も、ほとんどが港で働きだしてゐる。

やな言い方だけど、貧民街の被害が大きかつたせいで、港とかの荷運びはワケわからんねーほどの人不足だ。だから五体満足で働けるヤツは、いくらでも働き口があつた。

「親方？」

「おう、来たか。

嬢ちゃんも偉えなあ。あんまムリしねーでいいかんな？ 途中でもなんでも終わりにするんだぞ？」

親方、その猫なで声ヤメてくれ。鳥肌立つ。

「えつと、あの、大丈夫です……」

律儀に答えるこいつもこいつだし。

この親方、あの晩はとうとう最後まで気がつかなかつたつていうからストすぎた。酒かっくらつて船の上で寝てたらしいけど、朝になつたら街が丸焼けで、酔いがいつぺんで醒めたつてた。

おかみさん　こないだフィアが助けた人だ　の方も、あの晩は運良く隣町の親戚の家に行つてたとかで、夫婦そろつて難逃れしたつていう。

だから翌日俺が顔を出したら、この騒ぎで同業が死んじまつたつて嘆きながら、港の荷降ろし作業を一手に引き受けてた。

当たり前つて言えば当たり前だけど、その場で俺も捕まつて働かされたし。

オマケで、一緒に來てたフィアまで捕まつた。

自分でわざわざ捕まつた、つても言つだらうけど。

荷の計算してたヤツもあの晩亡くなつちまつたらしくて、親方が

困った困った言つてたら、ファイアが自分から名乗り出ちまつた。

つてもこいつのことだから、下向いて消えそうな声で、「簡単な計算なら出来る」つて言つただけだけ。

どつちしても、計算がちゃんと出来るヤツつてのは数が少ないから、その場で親方に雇われた。

「おーい、ファイア、テキトーなどこで終わりにして帰んねーと」

「あ、うん」

律儀なファイアを、仕事から引き剥がしにかかる。

「ずっとやつてるとキリねーし、みんなの帰りも遅くなっちゃうだ

?

「あ……！」

どんな時でも他人優先のファイアには、この手の説得がかなり効く。

「そうだぞ嬢ちゃん。

どうせ嬢ちゃんのことだから、仕事自体は終わってんだろ？ ほ

ら、暗くならんうちに帰んな

だから親方その猫なで声、気色悪いりいってば。

ともかくファイアが手を止めて、どつにか帰る体制になつた。

「ほれ、今日の働き賃だ。

ほら嬢ちゃん、小遣いもあげよくな。あと、土産ももつてくとい

い

「だ、だから親方あ……。

「二ール……？」

親方の猫なで声にアテられて脱力した俺を、ファイアの透き通つた瞳が覗き込んだ。

「だいじょうぶ？」

「あ、へーきへーき、気にすんなつて

大丈夫じゃないとか、言えるワケない。

「さ、今度こそ帰るぞ」

「うん」

フィアと連れ立つて、壊滅しまくつた街を抜ける。行き先は当た
り前だけど、ドクターの屋敷だ。

時間が合わなかつたのか、屋敷から來てる他の連中の姿は見えな
かつた。

丘へ続く道を、並んで歩く。

「お~い」

「あ、ドクター」

麓の門の辺りで、ドクターと姉貴とに出くわした。

「仕事、いいんですか？」

「いやあ、さすがに疲れてね。迎えを兼ねて散歩さ」

今、屋敷は怪我人だらけだ。

なんせあの騒ぎだつたし、しかも普通の医者は貧乏人なんぞ診や
しない。

つか、診てもらつても金払えないし。

そんなわけで、運良くここまでたどり着けた怪我人で、屋敷はあ
ふれてる。

もちろん一緒に逃げた隣のおばさんとか付き添いとかが手伝つて
るけど、治療は一手に引き受けたるわけだから、ドクターの仕事つ
たら半端じゃないはずだ。

で、抜け出してきたつてことらしい。

姉貴はまあ……よーするにオマケでついてきたんだが。

「仕事はどうな感じ?」

「ちつと忙しいけど、こつもむおりだからな～」

答えたなら睨まれた。

「あなたに訊いてないわよ。

「ファちゃん、疲れてない？」

姉貴ひでえ。

けどだからって、ストレートに怒れないのも辛いとこだ。ファイアが気にするし、つかこいつが大事にされるの、俺も嬉しかったりするし。

「や、1日分の話があるのは分かるけど、戻ったほうがいい。話は歩きながらでも出来るしね」

ドクターに促されて、みんなで歩き出す。例の屋敷は丘の上だから、延々上り坂だ。

「ドクター、今度はもつと平らなとこで家建てたらどうですか？」

「そうだねえ。だが、眺めはいいんだよ?」

くつだらない話しながら歩いていく。ただドクターの言ひつとおり、半分過ぎた辺りから、眺めは抜群に良かつた。

さつきまで厚かつた雲が切れてきて、薄布みたくなる。それが沈んだ陽の残りに、うつすら照らされてた。

広がる薄紫の空と、紫紺の海。

「海だけ見ると、なーんもなかつたっぽいのにな」

「そうよね……」

そのとき、フィアが小さく声を上げた。

「どうした?」

「あれ……」

フィアが指差す。俺らが見てたのとは違つ、むしゅっと夜に近い

南の空だ。

「あれがどうした?」

暗くなりかけた空にうつすら、あの夜からの橋が見える。気になることは気になるけど、まあいつもの話だ。けど、それをドクターがさえぎつた。

「待て、様子がおかしいぞ」

果然と見てるうち、橋が縮まつて光りだす。流れ星っぽくも見えた。

「なんかこつち……来てない?」

「来てつかも」

早い話、流れ星がこっちに向かって落ちてくるみたいな状態だ。
しかもだんだん、真っ赤な火の玉になつてくる。

「なんかこれ、ヤバく……ねえ？」

「まざいだらうねえ」

「なんでドクター、そんなに落ち着いてんですか。
平然としてるドクターに、そんなことを思つ。

「これつてやつぱ、逃げたほうがいいんじや？」

「そりゃ逃げたほうがいいだらうけど、でも、こまちひどいへ?
すぐ来ると思うんだけど」

姉貴も落ち着きすぎだろ。

そんなアホなこと言つてる間に、燃える“それ”がどんどん落ち
てくる。

「あー、あれなら海かな、行き先は」
「だからドクター、なんでそんなに平然と……いや、海ならいいけ
ど。」

「海なら、別になんでもないのかしら？」

「どうだろうねえ。あれがどのくらいか分からぬいけど、さすがに
何も無じじや済まなそなうなんだが

また物騒なことをドクターが言つ。

「お魚、だいじょぶかしら？」

姉貴、魚の心配してるばあいかよ。

そして、閃光。

沖に巨大な火柱が上がつた。

「すげえ……」

これしか言いようがない。

と、ふわりとフィアが前へ出た。

重さを全く感じさせない、風のよくな動き。

「ファイア？」

海を見据えたまま、こいつが何かを口にする。

きいん、という耳鳴りに似た音を立てて、俺らの周りの空間が軋んだ。

「何やつたんだ？」

答えはない。

不思議に思いながらも、そのまま火柱を見続ける。

「え……？」

気が付いたときには遅かった。なんか轟つぽいものが見えたと思った瞬間、街が瓦礫になつて舞い上がる。

ほとんど同時に周りの草がちぎれて吹き飛んで、木が何本か根こそぎ倒れた。

それから届く轟音。

ただ、俺らの周りは風さえなかつた。

よく見ると、いろんな破片が見えない壁みたいのに、弾かれてるのが見える。

ファイア。

それしか考え付かなかつた。

こいつがいち早く、なんか手を打つんだろう。じゃなきや今頃、

俺らも吹き飛んでたはずだ。

そのうちやつと、風が収まる。

「館、だいじよぶかしら？」

「うーん、ボロだからねえ。ちょっと自信がないな
あんまり心配してなさそうな顔で、ドクターが言つ
と、ファイアが前へ出た。

「ファイア、どうした？」

俺らの言葉は無視して、二つが宙へと浮く。

「お、おい？！」

何か言いたそうな、どうか痛そうな表情で一瞬だけ振り返って、次の瞬間ファイアは文字通り飛翔した。

姿がたちまち闇にまぎれて、見えなくなる。
飛び去った方向は、海だ。

「どうこつ、こと……？」

姉貴が呆然とつぶやく。

けど俺も、何がどうなってるのかさっぱりだ。

ただみんなで、ファイアが飛び去った方向 遥か沖を見つめる。
その沖に、白い線が引かれた。

「 なんだ、あれ？」

「」の街へ来てから海はずつと見てるけど、二つのは初めてだ。

「あれは

！」

気が付いたドクターが、血相を変えた。

「津波だ！」

「津波……？！」

見るのは初めてだけど、話に聞いたことはある。

でもそれ、地震の時とかだったような……。

考え込みながら眺めてる間に、線は信じられないスピードで近づいてきて、たちまち湾に差し掛かって高さを増した。

「あれじゅ、街が！」

ただでさえ爆風で半壊してんのに、あんな壁みたいなもんが来た
ら、全部流されるのは確定だ。

でも、どうしようもない。絶対つていいくらいなんも出来ない。

つか、もしかしたらここだってヤバい。

歯噛みしながら、波が押し寄せるのを見つめる。

けど。

「つそ、でしょ……」

遠く聞こえる姉貴の声。

津波が、全部じゃないけど消えた。

第14節

Fia

分かつていた。

あの夜、魔物が町を襲つたときから、逃れられない災厄が起つてゐる
と感じていた。

それが、来る。

「なんかこれ、ヤバく……ねえ？」

「まずいだろうねえ」

どこかちぐはぐな調子で続く会話を背に、ファイアは自分の中へ意識を向ける。

「これってやつぱ、逃げたほうがいいんじゃ？」

「逃げたほうがいいと思つけど、でも、いまからどうへ？　すぐ来るんじやない？」

この人たちを、死なせたくない。だから。
何かが止めたが、構う気はなかつた。
力は、ある。

「あー、あれなら海かな、行き先は」

「海なら、別になんでもないのかしら？」

「どうだろうねえ。あれがどのくらいか分からぬいけど、さすがに
何も無しじや済まなそつなんだが」

使つたことはない。

だが、使い方は分かる。

力を汲み上げて、形にする。

閃光。

遠い海に文字通りの火柱が立つ。

「すげえ……」

一ールの声を聞きながら、前へ出た。

海を見据えたまま、知らないはずの呪を口ずせる。

きいん、という耳鳴りに似た音を立てて、周りの空間が軋んだ。

「何やつたんだ？」

聞かれたが、ファイアには答えられない。そもそも、どう説明すればいいのか分からぬ。

分かるのは、これが必要だということだけだ。

“それ”が、来る。

風が揺らぐ。

次の瞬間、街が瓦礫になつて　そして一部の人も　空へ舞い上がつた。

海を渡つてきた衝撃波が襲つたのだと気づいたのは、どのくらいいただろ？

張つた魔法の盾の外側を、暴風が荒れ狂う。草が千切れ飛び、枝が折れ、木もなぎ倒された。

しばらくの間それは続いて……やつと、収まる。

だが、これで終わりではない。

魔法の盾を解きながら、ファイアはさらに前へ出る。

「ファイア、どした？」

心配そうな言葉には答えず、少女は虚空へ　踏み出す。

軽々と舞い上がる身体。

「お、おい？！」

一ールの声に、一度だけ振り向く。

なんと答えたらいいか分からず、言葉にはならなかつた。涙がこぼれて、それをこらえながら、海の上を翔ける。

こんなこと、したくない。

きっと怖がられて、嫌われるから。

それがフィアの思いだつた。

けれどやらなければ、全員死ぬだろつ。だから……。

沖に引かれた白い線が、近づいてくる。

立ちはだかるには、フィアはあまりにも小さい。

だが。

己の裡から呼ぶ。

力の源、巣くう物。

同化していくのが分かる。

あとは簡単だつた。

押し寄せる津波から力を引き抜いて、湾の入り口に防壁を張り、さらにエネルギーの流れも固定化する。

手の振りも呪文も要らない。視線だけで、粘土を捏ねるより簡単だ。

突然進む力を失くした波が、崩れ落ちて渦を巻く。けどそれさえも吸収されて変換されて、自らの力で作り出された見えない壁を、ただ洗うだけだつた。

それを眺めながら、防壁をチェックする。

状態から見て、夜中までだろつ。

急ごしらえのため、ずっと持たない。だがこれだけ持てば、大

丈夫なはずだ。

そう思った瞬間、ファイアはめまいを感じた。これだけのことを一気に、しかも初めてやったのだから、当然といえば当然だった。どこか安全な場所に、そう思つて辺りを見回して、思い出す。どこへ行けばいいのか。

本当は一ールのところへ戻りたいが、彼の顔を見るのが、ファイアは怖かった。

もし、恐れられて嫌われていたら？

行かなかつたからといって、嫌われなかつたことにはならない。だが、行かなければ見ないですむ。

いちばん安全な場所はこの辺りでは、ドクター先生の館がある丘だと分かつてたが、ファイアはもつと手前の町の外に降りた。身体が重くて立つてられず、道端につずくま。

意識が、暗闇に墮ちていく。

一ールに、会いたかつた。そう思いながら。

「おー、こんなところで寝たらダメだろ！」「

とつぜん、耳元で響いた声にはつとする。

やつとの思いで目を開けると、いちばん見たかつた姿があつた。

「ムチャ、したんだる」

まつすぐ顔を見られなくて、ファイアは視線をそらす。

「先生が言つにほ、この調子ならとつあえず、とつあえず津波はだいじょぶだつてよ。

さ、帰ろうぜ」

動けない少女を、少年が背負う。

不思議なくらいこの暖かさを、ファイアは感じた。

N e i l

フィアはまた、何かと寝込むようになった。

つても、最初よりはずつといい。あんなふつにまったく動けないわけじやなくて、ちょっと起きるとすぐ疲れて、つて程度だ。

原因は……あの津波の時のことだ、間違いないだろつ。

いま居るのは丘の裏側の、ドクターの別邸だ。

丘の上にあつた館のほうは、あの爆風で半壊した。町を追われて身を寄せてた人たちも、かなりの数が巻き込まれて、怪我したり亡くなつたりしてゐる。

ともかく住めるような状態じやなくて、仕方なく俺たちはあそこを捨てた。

ここは向いよつかなり狭くて、同じくらゝ荒れ果ててるけど、まだ住めるだけマシだ。いまじや町のほつも、住める場所なんてほんの少しになつてゐる。

貧民外は、文字通り壊滅。町の繁栄を担つてた港も、爆風でやられた船の残骸とか、そういうのがあつて使えない。城壁に守られた市街の一部が、どうにか生き延びた感じだつた。

すべてが動かなくなつて、町の人間のかなりが、領主からの配給で食いつないでる。

「この町に、いつまで居られるんかな

「そうねえ……

ドクターが駆り出されて居ないあいだに、姉貴とこれからのこと話をす。ずっと厄介になるわけにもいかないし、何よりこうこう

とになつた町は、先行きがたいていやばい。

港さえ動き出せば、まだ荷が来るからどうにかなりそうだけど、見通しは立つてなかつた。

そういうのを考え合わせると、ここを出るつて選択肢も、十分ありそうだ。

「隣町とか、噂じやどうなの？」

「ここよりマシだけど、それでもこないだの爆風で、だいぶ被害出てるつてさ。

そこへこの町からけつこいつ避難民が行つたんで、摩擦起きてるらしい

「どこの町だつて、新参者つてのは歓迎されない。俺らが故郷捨てたあとここに落ち着いたのも、この町がここいらじやいちばん大きくして、新参者をそれほど嫌わなかつたからだ。

加えて天災で被害が出てるんじや、町にも余裕なんてあるわけがない。

穩便になんていくわけなかつた。

「だとすると、ここでどうにかやつてくか、どこかもつと大きいところへ行くかよね」

「もつと大きいつて姉貴、それいちばん近いの王都だぞ？」

王都つてだけあって、この国でも最大だけど、代わりに軍やなんかも最大規模だ。ほかに古くから下町を牛耳つてる連中もいるとか、あんまりいい噂は聞かない。

「それにさ、いまファイア動かせねーし」

弱つてゐるのに引越しとか、よけい悪くするだけだ。

ともかくしばらくは様子見て、それから考える。それ以外にやりようがないだろう。

そのとき、乱暴に戸が叩かれた。

「誰かいないのか！」

言い方といい叩き方といい、何か横柄だ。
顔を見合させてから、俺らは急いで戸を開けた。

「王立、軍……？」

外に居たのは、白く輝く鎧の一団だった。甲冑の胸に燐然と輝く

王國の紋が、所属と権威を物語つてる。

「ノエアド伯爵の住まいに相違ないか？」

ノエアドってのは、ドクターの名前だ。

「はい、そうです。でもここのは、主人は、いま出かけておりまして……」

姉貴が答える。

「さようか。だが今日は、伯に用ではない。ここに年のは十ほ
どの女の子が、いると聞いたが」

フィアのことだ。

どう答えようか迷つてると、鎧の一団の間から、上等な服を着た
初老の男が前へ出てきた。どこかで見たことがある顔だ。

「君らはなんだね？ 物取りではなさそうだが 小間使いか？」
いきなり神経逆撫であるような事を言つ。

「私たちは先日の騒ぎで家を失くしまして、ここに世話をになつてい
る者です」

さすが姉貴、冷静だ。

「そうか。ならば入らせてもらつ
けどエララそうな態度で、強引に入つてはよひつある。

「ちょっと待てよ、あんた誰

」

「無礼者！」

耳がどうかなりそうな大喝とともに、白鎧に突き飛ばされた。

「よいよい、下々がこの顔を知らぬでも、やむを得まい。こここの領主、ドムイスじゃ。忘れぬようにな」

「この領主って言えば、たしか国王に近い血筋の人で、貴族の中でもトップクラスの有力者だ。それを考えると、かなり気さくな人なんだろう。

けどこの言い方とか、悪意なく見下されてる感じだった。

「して、ここに娘御はあるのか？ 先日の津波を食い止めた、巫女の末裔があると聞いたのだが」

「巫女の、末裔……？」

何のことだか分からぬ。でも、フィアに関係あることなんだろう。

う。

「あの、何のことか、分かりかねます」
姉貴が正直に言つたら、周りの白鎧がいきり立つた。

「何を言つ、きさまらきちんと答えよ！」

それをまた、領主とやらが制す。氣さくなだけじゃなくて、温
な人でもあるらしい。

「そんなに騒ぐでない、テアドよ。下々が話を知らぬのは、致し方
ないこと。

そなたら、この世界の成り立ちは知つてあるか？」

考え込む。

たしか子どもの頃聞いたのは、むかしむかしカミサマとやらがい
て人間を作つたけど、気に入らなくて滅ぼそうとした。でも人間は
戦つて地上を手に入れて、天と地は行き来できなくなつた、つて話
だ。

それを言つてみる。

「そうじや。無学なわりには、よく知つてあるではないか
この人は褒めてるつもりなんだろけど、ものすごく嫌味な言い
方だ。

「して少年よ、教えておこう。そのさらにむかし神代の時代に、神
の代理人たる神官と、巫女どがいたのだよ」

やつと巫女がなんなのかを理解する。

「言い伝えでは、巫女は強大な力を持つておつたといつ。また娘御
は、あの津波を食い止めたといつ。

巫女の末裔に相違なかろう。ほかにあのよつなことが出来る者、
おるとは思えぬ」

何かヤバい気がした。

フィアが何か力を持つてるのは、間違いない。けどそれは俺にとっては、別に怖くもなんともなかつた。あいつはそういうことはない。

ただ、俺にはその程度のことでも……ほかの連中にはたぶん違う。現にあれだけ良くしてくれた隣のおばさんや、貧民街の人たちは、フィアを避けてた。

出かけた先でいつも言われる。助かった、感謝してる、でもあの娘が怖いと。そして申しわけなさそうな顔で、なけなしの中からお礼と称して何かをくれて、そそくさと立ち去るばっかりだった。

そんなフィアに、目をつけるヤツがいたとしたら?
この目の前の、見たとこ温和そうな領主が、それを考えてたとしたら?

「それで、娘御は奥か? 入らせてもらひつぞ」

「すかすかと一団が入つてくる。
およそ貴族の別邸とは思えない荒れた室内を、領主が見回して面白そうに言った。

「ノエアド伯はこだわらぬと聞いておつたが、話以上じやな。若いのに酔狂なことよ。

そこの者たち、巫女の末裔の部屋まで案内」

領主の言葉が途切れる。

何ごとかと思つたんだろ?、出てきて姿を見せたフィアに、来てた連中の誰もが息を飲んだ。

「これが、巫女の末裔……」

淡い色の髪。透き通つた瞳。白磁の肌。

「神の力を受け継ぐ、というだけのことはあるの。なんと美しいことよ」

「これだけは素直な賞賛。

と、領主が恭しくフィアに一礼して、言った。

「巫女の末裔よ、お迎えにあがりました。国王陛下よりの招聘でござります。

陛下は巫女様をぜひ王宮へ迎え入れ、国の護りとして丁重にもてなしたいと仰つております」

「え……」

予想もしなかった話に、フィアが戸惑う。

「さ、巫女様」「ちらりへ」

領主がフィアの手を取る。

「いやつ……」

それを聞いた瞬間、俺は動いてた。領主の手を払いのけて、フィアを後ろにかばう。

「きさまっ！」

次の瞬間、何かが閃いて本能的に動いて 衝撃。

焼けたような熱さ。それから激痛。

「二一ルつ！」

フィアと姉貴の叫び声が遠く聞こえる。

「ほう、ぎりぎりとはいえ避けて急所を外すとは、大したものだ」
血のついた剣が振り上げられる。

「お願い、やめてっ！」

フィアの後ろ姿が、俺の視界をふさいだ。

あれ？

「そこをお退きください、巫女様。いやつの数々の無礼、さすがに捨てて置けませぬ」

「やめて、お願い！ 行きます、いっしょに行くからやめて、殺さないで！」

「そんなこと言つたに言つたのに、声が出ない。動けない。身体が冷えていくのが分かつた。

「では巫女様、こちらへ」

「待つて、二ールに手当てを……」

「何か人が動く気配がして、誰かが俺を覗き込んだ。傷が深くて、手持ちの道具では応急手当しか」

「それで良い。巫女様の希望だ、ともかく叶えて差し上げる」

俺の身体の向きが変えられる。

その視線の先に、ファイアが歩いてきた。

「ごめん……」

その瞳には、涙。

泣かせたくなかつた。

なのに、声も出ない。

「あのね、これ……」

ファイアが、助けたときからかけていたペンダントを外して、俺の手に握らせる。

そして、身を翻した。

「巫女様、お早く」

ペンダントと血の足跡を残して、ファイアは去つた。

F i a S i d e

王都は、遠かつた。

あれからどのくらい経ったのか、とうに日を数えることをやめてしまったフィアには、もう分からぬ。がたがたと揺れる寝台の上で、ニールに生きていてほしい、それだけを願いながら空を見る毎日だった。

あそこで応急手当だけはしたのだから、生きているはず。ずっとそう、自分に言い聞かせている。

ほんとうは、すぐにでも帰りたかった。ニールのそばに居たかった。だが恐れていた自分の内なるものは、予想もしなかつた結果を生み、周囲を傷つけてしまう。

だから……帰れない。

やがて揺れが収まり、人影が覗いた。

「巫女様、お加減はいかがですか？」

声をかけてきた男性に、フィアはちいしゃくづなずく。

「失礼いたします」

侍医役を務めている部隊の医務官が入ってきて、熱をはかり、脈を取る。

ただでさえ弱っていたフィアを、この旅はさらに痛めつけた。よほど急いでいたのだろう、最初は足の速い走竜の背に、直接乗つてだつた。が、半日と起きていられないフィアはすぐに倒れてしまい、一行は慌てて竜車を用意した。

だがそれに座しての旅もフィアは耐えられず、いったん途中の宿場へ逗留し、改めて極上の寝台車が用意された。今はそれに乗せら

れて、ゆっくりと進んでいく。

柔らかな毛が厚く詰められた寝台は、どこか当たつたりといつこではない。上掛けも選りすぐりの羽毛や羽根が使われていて、軽く暖かだ。

しかしそれでも、ファイアには辛い旅だった。

揺れる寝台は落ち着かず、ゆっくりと休めない。昼も大半は横になつて過ごしていた少女には、これは厳しかった。

ただ、揺れたたは前よりいくぶん小さくなつていて、それだけ整備された道に来たのなら、そろそろ王都が近いのかもしれない。

「何か、召し上がりますか？」

問いかれて首を振る。無理やりの長旅に加え、連れ出されたときの二ールの件も手伝つて、いまはほとんど食べ物が喉を通らなかつた。

「ですが、何か召し上がりませんと……果汁でも、いかがですか？」
言ひながら医務官はそつとファイアを起こし、背にいくつものクッションをあてがつて、寄りかかるようになる。

「さ、どうぞ」

最初から飲ませる気だったのだろう、後ろにうつせりながら盆を捧げ持つた小姓が居た。

吸い飲み コップはすでにムリ が口にあてがわれる。それを少しづつ、やつと半分だけファイアは飲んだ。
それだけで疲れてしまつて、朦朧としてくる。

「巫女様？」

医務官に呼ばれたのは分かるが、答える気力はもつなかつた。
何度か呼ばれたが、そのうち諦めたのだろう。身体がそつと横にされ、またがたがたと寝台車が揺れ始めた。

まどろみながら、想う。路地裏で拾われ、初めてまどもに扱われた日々を。

幸せだった。

とりたてて何もない、だからこそ幸せな日々。

もう戻れないと知りながら、戻ることばかりを夢見ている。こうしてまどろんで目を開けたら、またニールの顔が目の前にありそうな気がする。

彼の名を想つた瞬間、すきりと胸の奥が痛んだ。

自分のせいで、ニールは死んだかもしない。生きていると信じているが、それはただの幻想かもしれない。せめて、それだけでも分かれば……。

寝台車は何度か止まるることを繰り返し、ついに王都に入ったようだつた。車輪の立てる音にかき消されがちだが、それでも都会独特の喧騒が聞こえてくる。

元いた町はどうだらう、とファイアはぼんやり思った。たしか「王都は西」と言っていたから、東へずっと行けば、帰れるのだろうか？

「巫女様をお連れとな？」

「はつ、さようあります」

何か話し声が聞こえてくる。

「早馬で話は聞いていたが……ほう、なんと美しい」

たぶん誰かが覗いているのだろうが、まぶたを持ち上げる力もなかつた。

それからもじばらく、周囲のやり取りは続く。と、それに慌しさが加わった。

「陛下のお成りです！」

誰かがフイアを、そつとゆする。

「巫女様、目をお開けください。陛下がお見えです」

つながされて、フイアはやつとの思いで目を開けた。目の前に筋骨隆々の、豪奢な身なりの男がいる。

「なるほどたしかに美しいが、ずいぶん弱つておるな。これはどういうことだ？」

男が言うと、周囲の人間が平伏した。

「その、長旅が祟りまして」

「さようか。いずれにせよ、これはならぬ。どうにかせよ」

「はつ……」

誰もが頭を垂れる。

この人物が自分と、その力を欲したのだと、やつとフイアは理解した。

なぜこんなものを欲しがるのか、と思う。差し出せぬへりこなら、今すぐ差し出したいくらいだ。

昔から奥にくすぶるこの力は、フイアにとっては恐怖でしかなかつた。

いつ牙を向くか分からぬもの。

いつ自分を食い尽くすか分からぬもの。

見ぬ振り、気づかぬ振りをして、ずっとやり過ぎしてきた。だからもう動けなくなつたとき、心のどこかでほつとしていた。もう、向き合わなくてすむと。

だが結局、逃れられなかつた。

身体が持ち上げられる。

「巫女様、いまお部屋へ」

その連れて行かれた部屋で、何を要求されるのだろう?
怯えながらも、フィアは従うしかなかつた。

I l z e s i d e

二ールの傷は深かつた。医務官が手当してくれたおかげで生きてはいるが、予断を許さない状況だ。

「二ール……」

そつと触れる。

弟は、眠り続けたままだ。もしかしたら一度と、田覓めないかもしない。

手にはあのペンダントを、握り締めたままだつた。最初取りうとしたのだが、どうしても放そうとせず、諦めた。

なぜこんなことに、と思う。

フィアが悪いわけではない。むしろ、可哀想な子だ。得体の知れない部分はたしかにあつたが、それを誇示するでもなく、ただふつうに暮らせることをあの子は喜んでいた。

そのフィアを可愛がっていた二ールが、とつさに前へ出たことも、責められることではない。誰でも身内や大切な友人が連れ去られそうになれば、ああするだろう。

けつときよく自分たちのような者は、泣き寝入りするしかないのだ。あの白鎧の仕打ちにも、フィアを連れて行かれたことにも、意を唱えること 자체が許されない。

それどころか、自分たちは破格に恵まれているほつだろう。ふつうの者ならこんなことになつても、手当てもしてもらえなければ医者にかかることもない。そのまま野垂れ死ぬのがオチだ。

運良く上層に生まれないかぎり、そういうものだった。

「様子はどうだい？」

呼び出されて、仕方なく町へ出ていたドクターが、戻ってきた。
「おかえりなさい。ニールは……相変わらず」
上手く言葉にならない。

ドクターは外套をかけると、手際よく弟の傷を診始めた。

「傷そのものは、それほどでもないんだが。熱も持っていないし。

ただ、かなり血を失くしたからね」

実際はもつと酷いはずなのだが、気遣つてそう言ってくれているのだろう。いくら素人のイルゼとはいえ、そのくらいのことはさすがに分かる。

「やつぱりもう、ムリかしら」

彼女の言葉に、ドクターがはつとした表情を見せた。状況を理解していることに、気づいたらしい。

「この子に、何もしてやれてないの……」

父親も亡くなり身寄りがなくなつてからは、この弟が働いて支えてくれた。

寝込みがちな自分と違い、弟は病気ひとつしたことがないほど丈夫だ。身体も年より大きく、年齢を偽つて働いていた。両親の残してくれたお金を、たいして使わずにやつてこれたのは、すべてニールのおかげだ。

だから彼が、連れてきたフィアに惹かれてると気づいたとき、イルゼは一も二もなく賛成だった。いつまで生きられるか分からぬ姉などより、違うものを見て欲しかったのだ。
なのに……こんな結果になるとは。

「死んだら、どうしよう」

「大丈夫、死なせないよ」

言葉の強さに驚いて、イルゼは顔を上げた。

「きみの大事な弟を、死なせたりしない。それに万が一働けなくなつても、ソロに居ればいい」

「え……」

言われた言葉を理解して飲み込むまでに、時間がかかった。

「でも、それじゃ、ドクターが」「構わないさ。ただ、見てのとおり贅沢ができないけどね」視線が合つ。

だがそのとおり、ドアが叩かれた。

先日の件を思い出して、思わずイルゼは身を硬くする。ドクターが用心深くドアに寄り、返事をした。

「どなたです？」

「旅の者です。武器は持っていますが、使つつもりはありません」言葉に続いて、金属の触れ合つ音がした。ドクターが小さな覗き窓から、外の様子を確かめる。

「武器を手放してゐな。敵対する気はなさそつだ」

「でも、隠してたら」

自分でも疑いすぎだとは思うが、心の底からは信用できなかつた。これ以上、何かあつてほしくない。

「ドア越しでも構いませんので、お話を聞かせていただけませんか？」

「これには驚く。」

「何かする気は、本当になれやうだね」

「ええ」

荒っぽい用事なら、ドア越しとこいつ」とせざすがにないだらう。

もういちどドクターが覗き窓から外を見る。が、次の瞬間彼は大きくドアを開けた。

「ドクター？」

イルゼの困惑をよそに、彼はおもてへ歩み出る。
「そこの魔法医のかた、お願ひです。こちらに重体の患者がいるのですが、診ていただけませんか？」

言葉を失う。医者が医者に頼むなど、前代未聞だ。自分の腕が足りないと、言うに等しいのだから。

逆に言うならそんなプライドを捨てても、ニールを助けよつとしている、ということだった。

「お礼でしたら、何とかします。ですので、お願ひしたいのですが」「お礼などは要りません。我々に話を聞かせていただければ十分です。あとできれば、全員中へ入れていただければ」

一瞬ドクターが考え込んだが、すぐに彼は答えた。

「分かりました、みなさまどうぞお入りください」

この言葉に、一行のリーダーらしき人物が目配せし、後ろのほうから魔法医が歩み出る。

「患者はどちらに？」

「この奥です。剣で急所、ぎりぎりを突かれて、かなり失血しています。あとは魔法しか手がありません」

一人が話しながら、奥へと消えた。

入れ替わるよろにして、一団が部屋へ入つてくる。つい警戒したイルゼに向かい、一行のリーダーは気をくに話しかけてきた。

「お若いが、立派なたですな」

「あ、はい」

先日の白鎧たちとは、少々違つようだ。

「失礼ですが、こちらの奥方ですか？ それとも妹君でしょうか？ ともかく、椅子にかけてたまつがいいのでは？ だいぶ顔色が悪いですぞ」

「あの、でも、お客様が立つていてるのに座れません」

イルゼがそう返すと、一行の誰もが優しい笑みを見せた。

「我々は慣れているので。

けれどあなたは、だいぶお疲れのようだ。遠慮せずに座つてくれさい」

再度勧められて、イルゼは腰を下ろした。正直なところ、立つているのは辛かつたのだ。

「奥に、怪我人がいるようですが」

「はい。私の……弟です」

一行の間に、軽い驚きが走つた。

「それはなんとも……ですが、なぜ？」

もつともな疑問だつた。庶民が兵に剣で突かれるのは、滅多にあることではない。

イルゼは少しの間迷つたが、彼らに事の顛末を話した。ファイアを守つとして傷つき、彼女は連れ去られてしまった、と。

「 遅かったか」

思いもしなかった言葉に、ついオウム返しに聞き返す。

「 遅かった、とは？」

「 言葉どおりです。もちろん、我らの予想が正しければ、ですが。できればその少女のことを、詳しく聞かせてもらえませんか？」

乞われて、イルゼは話し始めた。路地裏に捨てられていたこと。とても弱っていたこと。不思議な石を手にしたとたん、元気になつたこと。街を魔物が襲つたとき、魔法で退けたこと。荒れ狂う風から、自分たちを護つてくれたこと。そして、津波を食い止めたこと……。

「 間違いありませんな」

「 ああ、まず間違いないだら」

「 話を聞いた一行が、囁き交わす。

「 あの、いつたい何が」

不安になつたイルゼが訊ねると、こんどは一行のリーダーが話し始めた。

「 フィアというその子は、おそらく我々の一族に言い伝えられている、『人の守り手』です」

「 ひとの、まもり、て……？」

初めて聞く言葉だった。

リーダーがうなずいて続ける。自分たちの一族には、災厄から人々を守る者が、生まれると言われているのだと。

「 じつを言えばほんの十年ちょっと前まで、誰もがそれはただの言い伝えだと、思つていたのです。

ある日、何かが囁き出すまでは

聞けば十年ちょっと前のある日、一族の占い師が一斉に、「守り手が生まれる」との暗示を受けたのだといつ。それは誰がどんな力ードを引いても、どんな香を焚いても、すべて同じだつた。

「それでも当時は、薄気味悪く思うものがいる程度でした。ところが十年前、一族のものが全員同時に、守人が生まれたと感じたのです」

さすがにこれは何がある、そういう話になり、守人探しが始まつた。

言い伝えでは守人は、一族の中に生まれるという。それなら最近生まれた子どもの誰かだろうと、片つ端から調べて回つたそつだ。「けれどみな違いまして。

散々悩んだ挙句、一族を捨てた誰かの子かもしれないといつことになつて、搜索が始まりました」

だがそれでも見つからず、いい加減諦めかけていた折に、今回のファイアの話を耳にしたのだといつ。

「それで、この家に？」

「ええ

津波を止めた少女なら、何があるに違いない。そう思つて訊ねてきたのだそつだ。

「一步、遅かつたようですが」

本当にそうだと思う。ほんの少し早く来てくれれば、ニールもファイアもこんなことに、ならなかつたかもしれない。

そこへ、魔法医が戻ってきた。

「どうした？」

「いま出来ること、すべてしてきました。ですが、靈液が足りません

魔法医の話ではニールは、いま急に死んでもおかしくないほど、

せん

危なかつたらしい。

「その場で応急手当がされたのと、そのあと医師が続けてきたりと診ていたために、どうにか生きていられたのでしょうか？」

今は魔法で強引に、命を繋ぎとめているのだそうだ。ただそれはあくまでも「繋ぎとめている」だけで、治すには至らないのだとう。

「治すには特殊な結界を張り、その中にじばらく居ないうとなりませんが、その結界を描くときに使う靈液が……」

それがなくては、どうにもならないらしい。

「インクか何かで代用できないのか？」

「ペンのインクと、いっしょにしないでください」

つまり、ダメなのだろう。

「なら、家の者に持つてこさせねば？」

「その間に、あの少年が死にますよ。

ともかくこの街の魔道士ギルドに行つて、掛け合つてきます。ただこの被災状況だと、使いきつている可能性が高いので、手に入るかどうかは

ハ方ふさがりといふことのようだ。

要するに、その靈液とやらがあれば、いいのだろうが……。

「あつー！」

思い出して、思わず声を上げる。

「どうされました？」

「その、使えるかどうかわかりませんけど、見ていただけませんか？両親の残した秘薬が何種類か、あるんです。その中に、もしかしたら」

遺産の秘薬を取り出して、並べてみせる。

ひとつひとつ検分していた魔法医の手が、止まった。

「あつた！ これならどうにか使えます」

魔法医が喜びの声をあげ、ニールの部屋へ戻つていぐ。その背へイルゼは、思い切つて声をかけた。

「あの、私も行つていいでしょうか？」

邪魔になりそうな気がして遠慮していたのだが、やはり弟のことが心配だ。

「脇で見てているだけなら、大丈夫ですよ。どうしても困る場合は言いますから、そのときだけ出でていただければ

「すみません」

部屋へ入るとすぐ、魔方陣を描く作業が始まった。先ほどの秘薬と魔法医の手持ちを合わせて、インクのようなものが作られ、それで部屋の床に紋様が描かれしていく。

「一区切りついたら言いますから、ベッドを中央に移してください。そのあと、残りを描きますので」

作業が着々と進み、ニールが寝たままのベッドが動かされ、さらに周りが描かれた。

最後に、全員が部屋から追い出される。

「結界内によけいな人が居ると、上手くこまません。ドアは開けて

おきますから、見ていてかまいませんよ」

言つて、魔法医が長い長い呪を唱え始める。

それに反応して、床に描かれたものが徐々に光りだし、呪が終わるとともに霧散した。

「どうぞ、もう入つて大丈夫です。この結界は、出入りは自由ですから」

おそるおそる入つて、弟のそばまで行く。

先ほどまでは違つて、頬に少し赤みが差していた。

「しばらくすれば、目を覚ますでしょう」

ただ、起きられるようになつてからも、しばらくはこの中に居てください。短時間なら結界から出てもかまいませんが、なるべく早く戻るようにお願いします」

魔法医がいろいろと注意する。

「動けるようになれば、もうここでは?」

「それがダメなんですよ」

あれほどのケガで、弟さんは生命力を使い切つています。それをこの魔方陣は、戻す力があります」

つまりここに居れば、癒されていくのだろう。

「ですが外へ出でてしまつて、生命力は生きているだけで削られていきます。それがまだ、弟さんは致命的なんですね」

完全に元に戻るには、最低でも半月はみてください。できれば1

ヶ月は」

魔法医の言葉に改めて、どれほど危険だったかを思い知る。

「氣をつけたまつがいいことを、あとで書いておきますね。

おや?」

部屋を出ようとした魔法医が、足を止めた。

「これは？」

視線の先は、ニールの手にあるペンダントだ。

「フィアが……いえ、連れていかれた女の子が、持っていたもので
す。最後に弟に、渡していきました」

「なるほど」

握り締めて放さないそれを、魔法医が調べる。

「ああ、やはりそうですね。

これは私たちが慈悲石と呼ぶ、癒しの効果がある珍しい石です」

「じゃあ、それで死なずに？」

言つてから、しまったと思う。ニールが死なずに済んだのは、何
人もの医者が関わってくれたおかげだ。
さすがに自己嫌悪に陥つたイルゼの肩を、誰かが叩いた。
「きつとそうだろうね。

本当に、いつ死んでもおかしくなかつたんだ。フィアの慈悲石が
きつと、ニールの命を支えたんだろう」「いつの間にか隣に来たドクターが、優しく言つ。

「私もそう思いますよ。正直手当てをしながら、いつ心臓が止まる
かと、ひやひやしていましたから」

魔法医も口を揃え、医師一人にフォローされたイルゼは、ますま
ず恐縮した。

そこへ、まつたく別の声がかかる。

「私にも、見せてもらえないか？」

一行のリーダーだった。

「あ、はい、どうぞ。ただあの子、握つていて放さないんです」

「よほど大事なんでしょうな」

言いながらリーダーはベッドに近づいて、しばらぐの間ペンダン

トを見めたあと、自分の懐をまさぐった。

取り出されたのは やはりペンダント。

石の大きさも、台座も、鎖も、それどころか細工までが、まったく同じだ。

「これは……？」

「私は、母の形見ですよ」

それと同じことじつことば。

「母には、一族を捨てた妹がいたそうです」

その言葉が、すべてを物語つていた。

「本当に、もう少し早ければ……」

そうすればフィアは無事この一行に保護され、ニールも怪我をせずに済んだのかもしれない。

「その少女は、王都へ連れて行かれたのですよね？」

「はい」

まさか王国軍を名乗り、陛下の名を騙っていた、といふことはないだろう。

「でしたら我々は、これから王都へ向かいます。こうこうと話を聞かせていただいて、助かりました」

「え、でも、私たちは何も、それどころか、弟まで治療していただきました。せめて、何か」

言いかけたイルゼを、一行は制す。

「あまり時間がありません。早く王立軍を、追いかけねばなりませんから」

「こう言われてはそれ以上言えず、慌しく発つ彼らを、見送るだけだった。

走竜の背にまたがる彼らの姿が小さくなり、丘の陰へ消える。

「中へ入ろう。あまり風に当たらないほうが多い」

ドクターに言われて、部屋へと戻る。

二ールは、前よりはだいぶ良さそうだった。あれほど顔色も悪くないし、触つても冷たくない。

「よかつた……」

安堵しながら手を伸ばしかけたとき、弟が小さくつめいて、薄く目を開けた。

「二ール！」

「あね、き……？」

かすれた声で、だがしつかりとそう答える。

「まだ起きないで。死ぬところだつたんだから」

「死……？」

目が覚めたばかりで、記憶がはつきりしないのだろう。ニールはぽんやりと考え込む。

だが次の瞬間、彼の表情が変わった。

「姉貴、ファイアは？！」

やはり、と思った。弟にとつてファイアは、既にそういう存在だ。だが、答えられない。

ニールは黙つてしまつた姉の様子と、手にしていたペンダントから、状況を察したようだつた。

彼の表情が沈む。

「あのね、ニール」

少しでも気休めになればと、イルゼは先ほどまでいた、一行のことを話す。

「じゃあ、ファイアのヤツは……」

弟の言葉に、彼女はうなずいた。

「人の守り手といつのが、なんのかはよく分からぬけど。でもの人たちのところに生まれていたら、とても大事にされてたと思うわ」

本当に、気の毒な子だと思う。

今ごろ、どうしているのだろう？

ただでさえ弱つていたのに、行つた先で酷い扱いを受けていないか、それだけが心配だつた。

あの一行に引き取られるか、せめて大事にされていてほしいのだが。

「ともかくあなたは今は、身体を治さないと

「ああ……」

答える一ールの表情に、イルゼは不安を感じた。

弟は……行ってしまうのではないだろうか？

いや、行くのは構わない。こんな姉の面倒を見続けるより、もつと自分のしたいようにするべきだ。

だが、治りきらないうちに出て行つてしまいそうで、それが気がかりだつた。

「ドクター、呼んでくるわね。何か食べたいものある？」

「んー、のど渇いたな」

「分かつた、何か持つてくるから」

そう言つて、ドクターを呼びに行く。

ついでに自分の心配事を、ドクターに伝えるのも忘れなかつた。

「どうか、確かにその可能性はあるな。『氣をつけないと』
ただ、何をどう氣をつければいいのかは、一人にもよく分からなかつた。

田を離さなければいいのだろうが、現実にはムリだ。ドクターは先日の惨事で街に大量の怪我人が出ているため、何かと呼び出される。その間はイルゼが留守番だが、常に見張つているわけにはいかなかつた。

要するに一ールがその氣になれば、いつでも隙を突いて、出て行けてしまつのだ。

「ともかくあの子に、部屋を出たら危険なこと、よく言つておかな

くちゃ」

「そうだね」

どれほどの効果があるかは分からぬが、言えば魔法医の言つていた半角くらいは。そのときのイルゼは、どう思つてゐた。

ニールの回復はめでましかつた。翌日には起き上がりようなり、翌々日には立てるよくなつた。

今はもう、田中はほとんど起きている。

「よかつた、良くなつて。でもほんとに、いいから出でやだめよ？」

「分かつてるつて。俺も死にたくねーもん」

平然とそんな軽口まで叩く。

「それより姉貴、雨だいじよぶか？ なんか降りそうじゃん」

「あ、いけない。今のうちに洗濯物、入れておかないと」

今にも雨が落ちてきそうな曇り空に、慌てて外へ出る。

洗濯そのものは、ドクターとの共同作業だつた。ほんとうならぜんぶ自分でやりたいのだが、長時間力仕事をやつていると、倒れてしまう。

それが申しわけなくて、イルゼは極力、こいついたことをやるようになつていて。

陽の匂いとまではいかないが、乾いたシーツや何かを、順番に取り込んでいく。

「これでよし、と」

まとめて入れた洗濯カゴを持って戻り、イルゼは奥へ声をかけた。

「ニール、何か少し食べる？」

答えはない。

嫌な予感。

慌てて部屋へ行くと案の定、ニールの姿はなかつた。

机の上にあの、貴重品が入つた袋が置いてある。それと、たどたどしい「ゴメン」の文字。

「ばかっ！」

言い捨てて、外へ飛び出す。
だが、ニールは見つからなかつた。

F i a s i d e

何も変わらない、フィアはそう思った。

ニールに拾われる前、あの思い出したくもない館にいた頃と、大した差はない。貸し出されないのだけは良かったが、自由がないのはいつしょだ。

窓辺にある椅子にかけ、遠い空を見る。

「ニール……」

思つのはそればかりだ。

それまでのどことも違つ、自分を自分として扱つてくれた場所、人。この期に及んでなお、帰りたくてたまらない場所。

ただ身体のほうは、王宮へ来てからだいぶ良くなつた。王の命令ということもあるのだろう、高価な薬湯や魔法薬が惜しみなく使われ、起きていられるところまで回復している。

下を見ると、たくさんの人でごったがえしていた。

数日前を思い出す。あの日はまだ立つのがやつとで予定の謁見は出来ず、王が部屋へ出向いてきた。そして王に抱かれてバルコニーへ連れ出され、集まっていたたくさんの人々に、「この国の守り神」と紹介されたのだ。

そんな力、ないにも関わらず。

眼下から沸き起こつた、うねりのよづな歓声を覚えている。それがあまりにも熱狂的で、恐怖を感じるほどだった。

若くたくましいこの国の王は、野心家だ。

前王の頃からこの国は拡張の一途で、周囲の小国を滅ぼし、あるいは吸収してきた。それは今の王にも受け継がれ、さらにスピード

を上げている。

自分をここへ連れてきたのも、その一環だということを、ファイアは理解していた。昨日、王に呼ばれて行つたときも、その話だった。

「何」ともストレートな王は、ファイアにそのものすぱり言った。「軍の先陣に立つて、敵を一掃するように」と。

出来るわけがない。

何かを護ることに使うならまだいいが、何かのために壊し殺すことなど、ファイアには出来なかつた。あの津波のときも、ニールとの姉やドクター、そういう人や街を守りたかつただけだ。

だから「力などない」と、首を振つたのだが……王が納得したようには見えなかつた。側近が何か耳打ちしてその場は収まつたが、不穏なものを感じる。

このまま何も起こらないでほしい、そんなことを考えるファイアの耳に、ドアをノックする音が届いた。

「どうぞ……？」

「巫女様、失礼します」

遠慮がちに、だが毅然と、男性が部屋へ入つてきた。たしか王の側近で、文官だ。

「陛下がお呼びです」

この城で王に逆らうのは、不可能と言つていい。渋々ながらもファイアはうなずいて立ち上がり、危うくよろけて倒れそうになつた。

「巫女様？」

問い合わせた文官に、うなずいてみせる。侍女がその様子に人を呼び、けつきよく抱かれて移動した。

だが移動する道筋に、何か嫌な冷たさを覚える。

「あの、どこへ？」

「城の広場ですよ」

なぜ広場なのだろう、そう思いながら連れて行かれた先に、王と側近たちが待っていた。

「巫女様、昨日と答えは同じですかな?」

「え?」

側近の言葉に、何のことか分からずに訊き返す。

「この国に、協力する件です」

「それは……」

Y e sと答えられず、視線をそらす。

「そうですか。これ以上逆らうなら、仕方ありません」

そんな言葉が聞こえた瞬間、王の隣にいた武官のこぶしが動いた。避ける間もなく、お腹に重い衝撃が走る。

薄れる意識の中で思い出す。この国の王は若く野心家なだけでなく、ひじょうに気が短いという話を。

昨日は側近が何か言つてくれたので穩便に済んだだけで、王が満足する結果を出さない限り、遅かれ早かれこうなつたのだろう。いや、最初から何かするつもりで、そのために昨日を穩便に済ませただけかもしれない。

なぜ。

その言葉が頭を占める。

人はそれほどまでに、すべてを手に入れなければならぬのだろうか?

そのためには、どうやっても出来ない」との拒否をえ、許されないのだろうか?

何かがぶつりと、切れた気がした。

次に目が覚めたときは、広場の中央だった。

視界に違和感を感じる。それに身体が上手く動かせない。何より、熱い。

何とかならないかと手や足を少し動かしてみて、ファイアはようやく気づいた。

自分が縛り付けられて『ここ』。

高い柱の上部に、がっちりとくくらつけられている。

ちょうど足の高さに作られた、台の上に立たされているので、吊り下げる苦しいということはない。だが後ろ手にされた手はもちろん、胸から下には何ヶ所も、きつく縄が回されていた。自由なのは、首から上くらいだ。

加えて足元で、積み上げられた薪がくすぶつっていた。

血の気が引くのを感じながら、周囲を見回す。

自分を見上げる王と、何とかを観衆に叫ぶ側近の姿が目に入った。

「この娘は自分を『巫女の末裔』と偽り、王へ取り入った。

神話の時代より伝わる『巫女』は神聖なものであり、これを汚すことは許されない！ また王に取り入り、この国を揺るがそうとしたことも大罪である！」

合わせるように、周囲から罵倒の声が飛びぶ。ほんの数日前、歓喜の声をあげたことも忘れて。

いや、忘れないのかもしれない。だからこそ逆に、狂ったような罵声を浴びせ、野次を飛ばし、この様子を楽しんでいるのかもしれない。

王と目が合つた。その表情が語る。『我が物にならないのなら、他国に利用される前に処分する』。

起こることすべてに諦めて対処してきたファイアの心に、何か違うものが入り込む。

薪にまとわりついていた炎が、一気に燃え上がった。

焰が高く舞い上がり、長い衣の裾を舐める。立たされている台が焼け始める。

「いや……」

初めての、抵抗。

衣の裾に炎が燃え移る。

「いやああああっ！」

光が奔り、炎もろともすべてが吹き飛んだ。

Neal

「王都が、壊滅？」

あと一息で王都つてどこにある宿場町の、貸し走竜の小屋で、俺は思わず聞き返した。

「ああ。一日前の話だよ。とつぜん何もかも吹き飛んだとかで、かなりの人が逃げてきてる」

だから王都へ行くなら走竜は貸せない、ってことらしい。

貸し走竜は、この国ではちよつと大きな町や宿場ならどこにでもある、よく知られたシステムだ。俺みたいな旅人はお金払って、走竜と特殊な魔法の手綱を借りて、次の目的地まで乗つっていく。

たまに行方をくらまして走竜を盗もうつてヤツもいるけど、魔法の手綱の効力がそんなに長くない。しかも切れると、走竜が暴れ出すようになつてる。

「王都の貸し竜舎は跡形もないつていうし、かといってここからじや、王都と往復するほど効力は持たないしね。戻る前に暴れ出してしまうよ」

盗難防止のためだから、走竜の暴れはハンパじやない。殺すしかない、つていわれるほどだ。

「すまないね」

「いえ、大丈夫です」

ここで「コネても仕方ない。

姉貴やドクターに悪いと思いながらも、別邸を出たあと、俺は貸し走竜を乗り継いでここまで来た。急ぎたかったのと、さすがに歩いてくのは自信なかつたからだ。

そうやつてやつと昨日の夕方、王都の近くまでたどり着いたとこ
だつた。

で、今朝また借りていよいよ王都へと思つた矢先、さつきの話だ。

「昨日起こつた騒ぎなら、昨日にはこの宿場にも報せが届いてた
はずだ。ただ俺は夕方ここへ着いてメシもそこそこに寝ちまつたか
ら、知るチャンスを逃したんだろう。

ともかく立つてもしようがないから、歩き出す。ただひさびさ
に荷物背負つて自分の足で歩いたせいか、思つてたよりキツい。
王都からここまで、歩くと半日ぐらゐの距離だ。けどこの調子
だと、日暮れ前になりそつた。

街道は、意外に人の姿があつた。走竜や自分の背、荷台なんかに
荷物をいっぱい持つてる人が多い。たぶん王都に親戚がいるとか、
そういう人たちが様子を見に行くんだろ。

その人たちに混じつて、黙々と歩く。

逆方向から来る人たちにも、けつこう会つた。こつちはみんなボ
ロボロで、荷物を持つてる人のほうが少ない。

「リヤノ、リヤノじやないか！」

「兄貴！」

少し先で声が上がつた。向こつから逃げてきた人とこつちから向
かつてた人が、上手く行き会つたらしい。

「心配で、食べ物を持つて行くところだつたんだ。無事だつたのか

！」

「ああ、うちはみんな無事だよ。公開処刑に行かなかつたおかげで、
助かつたんだ」

なんか物騒な言葉が聞こえる。

「隣は夫婦で公開処刑見に行つたつくり、行方知れずだよ

「人様の死にざまをわざわざ見に行つたりするから、バチが当たつたんだろう」「ひつ

俺は思わず声をかけた。

「あの、何があつたんですか？」

俺に視線が注がれる。

「あんたも誰か、王都に知り合いがいるのか？」

「兄貴、いま王都へ向かう人で、そうじやない人居ないと思つぞ」

「それもそうか」

突つ込まれて、兄貴が頭搔いた。

「王都で何がつて、どこから言えばいいかなあ」

弟のほうが、考え込みながら話し始める。

「ともかく公開処刑で火あぶりがあるつて話で、けつこうみんな見に行つちまつてさ。けど俺そういうの苦手なんで、行かなかつたんだ。

それで開始の鐘がなつたと思つたら、わりとすぐ、いきなりぜんぶ吹つ飛んじまつたんだよ」

王都に居た人たちも、よく分からぬほど、とつぜんだつたらしい。

「王城はぜんぶ、崩れちまつたつてさ。俺の家からでも、塔とかなくなつちまつたの分かつたから、ホントだらうな。

広場はいちばん酷くて、でつかい穴しか残つてなかつたらしいし最大クラスの古竜が大暴れしたとかくらいの、ものすごい状態みたいだ。しかもそれが一瞬でつていうんだから、どんだけ被害がでたかなんて、想像もつかない。

「でもなんで、そんなことに」

「ぜんぜんわかんねえよ。でもウワサじや、公開処刑のせいだらう

つて

知り合いに会えてほつとしたのもあるんだろう、この人熱っぽい調子で、どんどん喋る。

「公開処刑か……。それにしても、火あぶりってのは相当だな。いつたい何やらかしたんだ？」

「それも、よくわかんねえんだよな」

ほんとに、いろんなことが謎のまんまみたいだ。

「何日か前にお触れがあつて、『巫女の末裔』をまとやらが、この国に来たって。お披露目があつたんだ」

出てきた言葉にはつとする。

「あの、それで？」

「え？ ああ、それで何日かしたら、こんどはそれがウソだつたつて。だからそんな大罪人は、火あぶりって話だつた」

フィアのことだ。

フィアをムリに連れて行つておいて、何か思惑と違つたから、殺そうとしたに違ひなかつた。

「ただ俺はさ、なんか違う気がすんだよな。あの王様のことだから巫女さまってのはホンモノで、でもなんかムチャ言つて断られて、そのせいで火あぶりじやねえかなつて」

「ありそうだな……」

俺の居た町は王都から遠くて、王様とかあんま関係ないから、好きとか嫌いとかつて話もなかつた。けどこの辺じや、けつこう嫌われてるらしい。

「このあいだもどつかの使者を、無礼働いたとかで、首切つて晒してたからな」

王様つてのは、かなり血の氣の多い人みたいたつた。

「その巫女つて、どうなったか分かりますか？」
何か少しでも、分からぬかと訊いてみる。
男が考え込みながら答えた。

「吹っ飛んだあと、ぶち切れた連中が殺してやるつって、探して
見つけたっては言つてたな。ただそいつらもやられちまたから、
そのあとはどうなったか……」

とりあえず、そのとき生きてたのは確かみたいだ。
「俺、やっぱりこのまま王都行つてみます。あいつまだ、いるかも
しれないんで」

「そうか、気をつけてな。会えること祈つてるよ
別れてまた歩き出す。

道を行くとだんだん、行き会つひとたちの様子が酷くなつてつた。埃まみれでボロボロつてだけじやなくて、どつかケガしてゐる人が多い。道端にしゃがみ込んでゐる人や、中には倒れて動かない人もいた。たぶんさつき言つてた、「ぜんぶ吹つ飛んだ」ときに、こうなつたんだろう。

まだ半分程度しか來てないのにこれじや、王都はこないだ俺らの町が魔物に襲われたとき以上に、ヒドいことになつてそつだ。

「これを、フィアが。

背筋に冷たいものが伝つ。

何かふつうとは違う、とんでもないモノを持つてゐるのは分かつてたけど、こんなのもう人じやない。

そう思つと怖くなつて、足が止まつた。

あの寂しげな表情を思つと、行かなきやダメだと思つ。けど、足が動かない。

「 そこの坊や」

とつぜん、誰かに声をかけられた。
あたりを見回す。

「私よ」

いつの間にか、背の高い人がすぐ横に居た。

フードを田深にかぶつてて、手には杖。外套はびつしり、不思議な紋様で縁取りされてる。どう見ても、どつかの魔道士ギルドに属してゐるとか、長年経験積んだ占い師とか、そんな雰囲氣だ。

「ちよつといつちへいらつしゃい。あなたと、話さなきゃいけない

」とあるようだから

自分でもワケが分からなくなつてたせいが、この人に言われるま
ま、俺は街道から離れたところまで行く。

「さて、と。ここなら誰も、聴く者もないわ。

坊やはあの、巫女さまの知り合いね？」

驚く俺に、女人人が笑つた。

「そんなに驚かなくていいわ、この水晶玉が囁いただけ。世の中に
は不思議なことは、ゴマンとあるのだし。

さ、坊やも座りなさい」

野原の中にいくつも転がる大きな石のひとつを、俺に勧める。

「いい子ね。さて坊や、巫女さまをどう思つ?」

とつさに答えられなかつた。

「怖い?」

下を向く。

「怖いでしょうね。でも、それがふつうよ

「え?」

この人は笑つて言つた。

「人は自分より強いものを、恐れるもの。殺されるかもしれないか
ら、それは当たり前。だから、おかしいことじやないわ」

女人人がそこで、一回言葉を切る。

ふつと、風が通つてつた。

「けど坊や、いちばん怖かったのは、いちばん辛かったのは、誰か
しら?」

「あ……」

そんなこと、考えるまでもなかつた。それは間違いなくファイアだ。
「行つておあげなさい。あの子、待つてるから。

そうやつ、そのペンダントを貸して

言われるまま、俺はずつと持つてた、フィアのペンダントを差し出した。女人が手をかざして、何か呪を唱える。

「これで、あの子の居場所が分かるはず。さあ、早く行きなさい」

俺に返しながら、この人が急かす。

ペンドントを握るとたしかに、なんとなくフィアのいる方向が分かつた。

「ありがとう　え？」

視線を上げてお礼を言おうとしたときには、女人の姿はない。首をひねりながら歩き出すと、また違う人に呼び止められた。見るからに調理人つて格好の、恰幅のいい人だ。

「あんた今、女人人と話してなかつたか？」

「ええ。でも急に、いなくなっちゃって」

俺の答えに、調理人がなんとも言えない表情になる。

「俺は以前城の調理場で、長く働いてたんだが……あの人、ずいぶん昔に亡くなつた、太后様だよ」

「え……」

背中があわ立つ。

太后さまってたしか、今の王の母親のことだ。その人が、とっくに死んでるのに、俺の前にいたつてことは……。

おじさんが話を続ける。

「もともとは、力のある魔道士だつたらしい。城のお抱え占い師になつて、よく当たるつて評判で、前王のお妃になつたんだ。

亡くなられたあともこの国を心配して、ときどき姿を現すつて、もっぱらの噂なんだよ」

「そりなんですか……」

そんな人がいたのに、なんでこんなことになつたのか。
そもそもなんで、そんな人が俺のとこに出たのか。

思う俺の背に、風が囁いた。

あの子もあの人も、昔はあんないじやなかつた。私が、死ななければ。

声が空に舞い散る。

巫女の末裔よ、許して。國の者たちよ、許して。

そして最後に、俺の耳元で。

行つてあげて、あの子のといひぐ。

フィアのペンダントを握り締めて、俺は歩き出した。

F i a s i d e

じこは、どこだろ？

冷たい地面に身を横たえながら、フィアはそれだけを考えていた。

帰りたい。

あの町へ、あの家へ。

廃墟と化した王都を後にして、何日過ぎたか分からぬ。東へ、そう思いながらも人が怖くて街道を行けず、離れたところを歩くうち、道も見失つた。

手をついて身体を起こし、立ち上がりと足に力を入れる。だが四つん這いになる前に、腕が力を失つた。

ぱちやりと泥のしぶきが上がり、顔と衣装を汚す。

どこをどう歩いたのだろう？ いつの間にかフィアは、どこまでも続く泥地に迷い込んでいた。

乾いたのどを潤そぐと、近くの水たまりに片手を伸ばしてすくい、そつと口に含んで 思わず吐き出す。清流を望んだわけではないが、ぶくぶくと泡の立つ沼地の腐つた水は、異臭を放つていて飲めなかつた。

もうずっと食べていない。食べる氣にもなれない。

それがよけい体力の衰えを招いているのは、フィアにも分かつていたが、どうすることも出来なかつた。

ずっと館の中に閉じ込められ、せいぜいが別の館へ送り迎えされるだけだったフィアには、食べられるものが分からぬ。木の実や草やキノコさえ、探し出せないので。

街道を行けば、もう少しマシかもしれないが、それも出来なかつた。

何もかもが、怖い。

心変わりする他人と、何より自分自身が怖い。

また同じことを起こしてしまつのが怖い。

けつときよく自分でも何がしたいのか分からぬまま、漠然と東を想い続け、ふらふらと歩き続けた。

だがそれもそろそろ、終わりかもしれない。

もともと歩くのもおぼつかないほど、弱っていたファイアだ。水も食料もない状態でさまで歩くのは、無謀以外のなにものでもなかつた。

現にもう、立てない。

ニールに会えないまま力尽きるのは寂しかつたが、これでいいのだ、という気もしていた。それどころかあの路地裏で、ニールに捨られる前に、死んだほうが良かつたかもしれない。助けてもらつたばかりに、彼に怪我をさせ、王都を消してしまつた。災厄を引き起こすだけの自分など、このまま人知れず朽ちていくほうが、いいに決まつてゐる……。

そして、気づく。

自分が泣いていることに。

悲しいわけではない。嬉しいわけでもない。怒つてゐるわけでも、悔しいわけでもなかつた。

広がる虚しさの中、涙だけがこぼれる。

それがひどく辛くて、自分の中の思い出にすがりついた。

ニール、姉のイルゼ、ドクター。ほんとうにやさかで、でも暖かい日常。

ただそれだけで、良かつたのに……。

どこにこれほど残っていたのか、そつ思ひぼじこ、涙があふれて止まらなかつた。

なぜあまま、いられなかつたのだろう?
なぜあのまま、そつとしておいてくれなかつたのだろう?
思ひがすつと、そこで巡る。

そのとき、何かが囁いた気がした。

彼が、来るわ。

驚いて視線をさまよわせたが、人の姿も気配もなかつた。

風が頬を撫でる。

巫女の末裔よ、許して。

それきり、風は沈黙した。

代わりに何かが泥の水面を乱す、規則正しい音。

「フィア!

いちばん聞きたかつた声。

音の間隔が早くなる。

身体の向きが変えられる。

いちばん会いたかつた、人。

「二、ル……」

かすれる声で呼ぶ。

「バカヤロ!」

そう怒鳴られたが、抱きしめられた腕の中は暖かかつた。

Neal

ファイアの状態は、ヒドいなんてもんじやなかつた。

どう見たつて、最初に拾つてきたときより悪い。食べ物はもぢろん、水もほとんど喉を通らなかつた。きっと魔法使つても、もうムリだう。

それでも何かになればと思つて、俺は持つてきてたペンダントを、ファイアにかけてやつた。癒しの効果があるつていうな、ちよつとは足しになるはずだ。

あと……俺自身もヤバい。

身体が、石でも詰まつたみたいに重くてだるい。あと傷の治りきつてなかつたところが、少しへんになつてて熱を持つてゐる。走竜に乗つてるときからいろいろ少し感じてたけど、降りて歩いてから、一気に来た感じだつた。

姉貴、ゴメン。

部屋から出たらダメだつて、言われただけのことはある。ただ、後悔はしてなかつた。悪いことをしたとは思つてゐるけど、それでもファイアに会えたことのほうが、俺的には大きい。

いま居るのは、崩れそうな廃屋の中だ。ファイア見つけた沼地のとなり、小さな森の入り口に建つてた。

ずっと使われてないらしくて、中も外も荒れ放題だつたけど、雨露がしのげるぶんかなり違ひ。

これからどうするか。

それがこちばんの問題だつた。

「 フィアは、動かせるよつた状態じゃない。生きるのが不思議な
くらいた。」

ホントは誰か医者なり、人を呼んでくればいいんだろうけど、そ
れもできそつにない。どこに人が住んでるか分からないし、待たせ
てる間に、フィアがどうなるか分からない。万が一魔物や野獸にで
も見つかつたら、その場でエサだらう。

いろいろ考えてみて、けつよく俺は、フィアを背負つて連れて
くことにした。

明るくなるのを待つて、様子を見に、ちょっと外へ出てみる。け
ど街道は、さすがに見えなかつた。でも街道から北へ来たはずだか
ら、まつすぐ南へ進めば、そのうちぶつかるだらう。

なるべく早く出発したかつたから、すぐ切り上げて小屋へ戻る。
フィアを早くビリにかしてやりたいし、俺もずっとはたぶんムリだ。

「 フィア、ゴメン、移動するけどガマンしてくれな?」

言つとフィアは目を開けて、かすかにうなずいた。もう声を出す
のも、おつくうなんだらう。

ぐつたりしたままのこいつを、ビリにか背負つて小屋を出る。
そのとき、風が頬を撫でた。

「 うつちへ。

囁き声に視線をめぐらすと、昨日は氣づかなかつたけど、小屋の
裏手から道が続いてた。

興味惹かれて、風に誘われるまま歩いてく。

「 泉?」

ほんの少し行つたところが、泉のある小さな広場になつてた。ぽ
つかりそこだけ上が空いてて、遠く晴れ渡つた空が見える。周りは
名前も知らない大きな白い花や、もっと小さい花が、数え切れないと

ほど咲いてた。

ひとりヘフィアを降ろして、そつと手を入れて、すくう。久々の澄み切った水は、甘くて美味しかった。

「フィア、飲むか？」

言いながらこいつの口に、少し水を含ませてやる。でももう飲む力も残つてないみたいで、こぼすだけだつた。

仕方なしに、こんどは持つてた布切れをよくゆすいで、顔や手足を拭いてやる。泥なんかで汚れきつてたのが、元通り彫刻みたいにきれいになる。

ふつと、フィアが目を開けた。

引き込まれそうなほどに澄んだ瞳。

「だいじょぶか？」

大丈夫じゃないのなんか分かつてるけど、そつ訊く。

フィアがうなずいて、視線だけで、空と周囲を見回した。

「きれ……い、だね……」

「ああ」

森の中、日の光に花と水面とが照らされる。まるでおとぎ話の中に出でくる、秘密の泉みたいだ。

でも……ここのおとぎ話の中じゃない。

「ニール、あの、ね……」

「なんだ？」

苦しいはずなのに、フィアが必死に喋りつづくる。

「来て、くれて……嬉し、かつた」

「バカ、当たり前だろ」

もつとほかに言つことがあるはずなのに、こんな言葉しか出でこ

ない。

「会いたかった、の……」
「いつの瞳から涙があふれて、何も言えなくなつて、抱きしめる。
あの時みたいに、出てつてからいままで何があつたか、俺の中に
流れ込んでくる。

「ゴメンな、なんも出来なくて」「
それしか言えなかつた。

「ううん……」

フィアが首をふる。

「来て……くれた、から」

なんでこいつが。

なんでこんな目に。

心の底からそう思つ。

フィアの望んだものなんて、なんの変哲もない、じぶんじぶんつう
の生活だったのに。

「ニール

フィアが遠い瞳をして、言つた。

「好き……」

「俺もだ」

間髪いれずと思わず答える。

フィアはほんとうに嬉しそうに微笑んで、動かなくなつた。

花の咲き乱れる泉のそば、彼女は墓標に話しかけていた。

「もう、誰もあなたたちに、何もしないから……」

こんなことがあつてたまるか、そう思つてゐる。だが現実には、特にフイアは、死んで初めて平穏を得たと言つていい。

あまりにも理不尽だった。

ここを知つたのは、不思議な風が囁いたからだ。王都が数日前に消えたと聞こえてきた頃、イルゼにそれは囁いた。

あの二人が、と。

それだけで何故かピンときたイルゼは、渋るドクターに頼み込んで、風を頼りにここまで来たのだ。

そして見つけたのは、折り重なるように倒れてい、ニールとフイアだった。

何があつたのかは、だいたい見当がつく。ともかく一人はふたたび出会い、ここで力尽きたのだろう。

不意に、走る風が頬を撫でた。

気配を感じて辺りを見回す

「え？」

泉の向こうに、二人の姿がある。どちらも楽しそうだ。

「ニール、フイア！」

思わず声をかけたが、そのときにはもう姿は消えていた。あるいは、最初から田の錯覚だったのか。

少し考えて、やはり氣のせいではない、とイルゼは思つた。そう信じたかった。

「また来るから。仲良くね？」

そんなこと言つ必要はないと知りながら、一つの墓標に声をかける。

心えるよつに、楽しげな風が吹き渡つた。

エ・ン

あとがき

最後まで読んでくださり、ほんとうにありがとうございました。昔から持つていた話を、やっと形に出来ました。

毎日書くのは大変でしたが、読んでくださる皆様のおかげで、無事完結させられました。

感想・批評大歓迎です。一言でもとても嬉しいので、お気軽にどうぞ

この話はこれで完結となります、シリアル長編ルーフェイア・シリーズは、当分先まで連載します。こちらもよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2114e/>

遠き風に願いし君は

2010年10月9日14時36分発行